



TASC

[Take Actions for Social Change 2025]

日 ASEAN ユース・フォーラム

アクションプラン報告書

TAKE ACTIONS
FOR SOCIAL CHANGE

事業概要

このプログラムは、国際交流基金、ASEAN 大学ネットワークおよび京都大学東南アジア地域研究研究所が共催し、ASEAN 事務局の後援のもと、加盟国間の良好な関係を促進することを目的として実施されています。

こんにちの世界はさまざまな課題に直面しており、これらの問題を解決するためには、国籍や社会におけるそれぞれの立場を超えて知恵を出し合い、協力し合うことが不可欠です。また、一緒に取り組むだけでなく、共通の課題の解決を目指す意欲をひとりひとりが高めることもますます重要になってきています。

このプログラムは、ASEAN 諸国と日本の若者が出会い、一緒に学び、協働する機会を提供し、世界規模の問題に対処するための実行可能な方法について、各参加者が深く考え、協力し、実践することを促す機会となりました。

参加者はチームに分かれ、一連のオンラインプログラムやフィリピンおよび日本へのフィールドトリップを通じてテーマを探究しました。チームメートとの対話や協力を重ねながら、参加者はより良い世界を共に創るアクションプランを作成し、プログラムの集大成としてそれぞれの取り組みを発表しました。

本プログラムを通じて、参加した学生たちは、その視野を広げ、多様な文化環境への受容性と寛容性を高めるとともに、社会に意義ある変化をもたらすことができるグローバルリーダーとして行動する意欲とスキルをさらに発展させることが期待されています。

テーマ 2050年に向けて平和でより良い世界を共に創る

TASC 2025のテーマ プラスチックごみ

参加人数 28名（9か国：カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、タイ、ベトナム、日本）

主催 国際交流基金

共催 ASEAN 大学ネットワーク、京都大学東南アジア地域研究研究所

参加学生

チーム名：Terra Rangers

p. 4-8 **より環境に優しい世界に向けた3つのステップ**
— 若者の環境配慮行動を促す教育的アプローチ

Yuki Lisa Chheang, 王立ブノンベン大学 (カンボジア)
Sutan Adam Kusuma Tanaka, ガジャ・マダ大学 (インドネシア)
橋本 友, 立教大学 (日本)
Muhammad Amir Bin Shaari, マレーシア国民大学 (マレーシア)
Mya Myintzu Htet, ヤンゴン経済大学 (ミャンマー)
Niña Michaela S.J. Ragudos, デ・ラ・サール大学 (フィリピン)

チーム名：BlueWave

p. 9-15 **TraSure (Trash to Treasure : ごみから宝物へ)**

Fauzan Abdullah Azzam, インドネシア大学 (インドネシア)
皿井 楓, 愛知県立大学 (日本)
Then Min Han, マレーシアサインズ大学 (マレーシア)
Thanawit Karnjanapinyoying, プリンス・オブ・ソンクラー大学 (タイ)
Pham Quynh Nhu, ベトナム国家大学ハノイ校 (ベトナム)

チーム名：MANIBU WARASHI

p. 16-21 **Manibu のエコクエスト :**
カードをめくって世界を変えよう (これやりたい!)

Baginda Muhammad Rifan Abdillah, 国立アイルランガ大学 (インドネシア)
能瀬 颯菜, 静岡大学 (日本)
Shivabala A/L Ganeish, マレーシアサインズ大学 (マレーシア)
Marquez Fea Bambina Trinidad, デ・ラ・サール大学 (フィリピン)
Phimsiya Thongyoo, チュラーロンコーン大学 (タイ)
Nguyen Tien Thanh, ベトナム国家大学ホーチミン市校 (ベトナム)

チーム名：GREEN HASHIRAS

p. 22-29 **EcoLeads : ユース・アクション・インパクト**

Sovannvita Torng, 王立ブノンベン大学 (カンボジア)
木村 魁, 京都外国語大学 (日本)
Padaphone Atvaly, ラオス国立大学 (ラオス)
Eaindray Phoo Myat, ヤンゴン大学 (ミャンマー)
Siriphong Chotirat, プリンス・オブ・ソンクラー大学 (タイ)
Thu Hang Tran, ベトナム国家大学ハノイ校 (ベトナム)

チーム名：Blue Horizon

p. 30-35 **Blue Horizon オーガニゼーション :**
プラスチックごみ問題に取り組む、世界規模の若者主導組織

Sreypitch Kuy, 王立法経大学 (カンボジア)
Chintammy Pamela Artanti, 国立アイルランガ大学 (インドネシア)
鈴木 純伍, 武蔵大学 (日本)
Ram Paulo Macam, デ・ラ・サール大学 (フィリピン)
Puteri Man-Aree, プリンス・オブ・ソンクラー大学 (タイ)

より環境に優しい世界に向けた3つのステップ

— 若者の環境配慮行動を促す教育的アプローチ

Member

Yuki Lisa Chheang
Sutan Adam Kusuma Tanaka

橋本 友
Muhammad Amir Bin Shaari

Mya Myintzu Htet
Niña Michaela S.J. Ragudos

I はじめに

A. 問題の背景と趣旨

プラスチック汚染は、もはや単なる環境問題ではなく、早急な対応を要する地球規模の危機である。国連環境計画（UNEP、2023）の最新報告書は、仕組み全体の変革がなければ、2040年までにプラスチック汚染がほぼ三倍に拡大すると警告している。プラスチック汚染のこうした深刻化は、海洋生物だけでなく、陸上生態系や人々の健康にも深刻な脅威を及ぼしている。リサイクル技術の進展や政策による使用禁止措置が進む一方で、廃棄物は依然として私たちの地域社会に蓄積し続けている。このことは、単にインフラ整備の問題ではなく、人々の行動や日々の習慣に深く根差していることを示している。

「知っていること」と「実際に行動すること」との隔たりは、私たちが直面する大きな課題の一つである。多くの人はプラスチックが有害であることを理解しながら、依然として無責任に使い続けている。Heidbreder et al. (2019) は、習慣や社会規範が、単なる認識以上に消費行動を左右する強い要因となることが多いと指摘している。これは、持続可能な行動は単なる情報だけでなく、深く根づいた態度や知覚された行動統制に基づいて生じるとする計画的行動理論（Ajzen, 1991）を裏づけるものである。

したがって、効果的な教育は、単に知識を伝えるだけでなく、価値観の形成に積極的に働きかけるものでなければならない（Frick et al., 2004）。本プロジェクトは、高校生に焦点を当て、この課題に取り組むことを目的としている。青年期は、個人が倫理的枠組みを形づくっていく重要な発達段階である。研究では、この形成期に培われた環境価値観が、将来の行動を予測する強力な要因であることが確認されている（Evans et al., 2007）。この重要な段階に働きかけることで、「より環境に優しい世界に向けた3つのステップ」は、単に知識を得るだけでなく、持続可能な未来の実現に向けて実際の行動を起こす世代を育むよう設計されている。

B. フィリピン及び日本訪問から得た知見

フィリピンのように、農業国であると同時に多くの沿岸地域

を抱える国においては、プラスチックごみの問題が島嶼部から都市部に至るまで存在していることを学び、考察することができた。また、プラスチックごみ汚染が地域に様々な形や異なるレベルで影響を及ぼしていることを知り、大きな気づきがあった。取り組みや連携は存在するものの、関心の低さ、実施面での課題、さらに自然災害による被害のため、それらのプログラムは持続的なものになっていない。オランゴ島のマングローブ、埋め立て処分場、エコパーク、SM GUUN 社によるフラフ燃料施設、そして JunkNot による創造的なアップサイクルの取り組みを視察し、フィリピンの人々が、より環境に優しく健康的なフィリピンの実現に向けて努力していることが分かった。また、これらの取り組みは人々の懸命な努力の賜物であり、厳しい状況に置かれながらも課題を乗り越えようとする彼らの強い意志とたくましさを感じられた。訪問先の中でも、最も大きな影響を受けたと感じたのは、バセコ地区を訪れ、ごみを地域内の生計手段へと変えてきたコミュニティと出会ったことであった。彼らが語ってくれた心を打つ話を通じて、彼らの置かれた状況への理解を深めることができた。また、廃油を石けんにアップサイクルすることや、作り直した財布を販売することのようなシンプルな取り組みであっても、変化を生み出し、地域を支えることができるのだと分かった。彼らは地域社会を巻き込む方法を見だし、たとえ家庭レベルであっても、変化を生み出し、課題を解決し、他者のための機会を生み出すことが可能であることを示していた。地域社会における彼らの調和ある関係性からは、近隣の人々への思いやりと守り合う姿勢がうかがえ、彼らは置かれた生活環境の改善に向けて協力して取り組んでおり、ごみの削減・再使用・再資源化は、その協働の成果であった。

日本での訪問では、東京、京都、大阪にある数多くの優れたリサイクル施設を見学し、持続可能性が日常生活に見事に組み込まれていることを実感した。ごみ分別や資源回収のための先進技術に加えて、とりわけ際立っていたのは、リサイクルを社会全体の責任として捉える文化的な意識であった。特に印象に残った話題の一つが、収納容器や透明のクリーニングカバーの再資源化に見られるような、水平リサイクルの実践であった。東京では、こうした持続可能性の目標に沿う民間セクターの取り組みに対し、財政支援が行われている。その具体例として、テイクアウトやデリバリーで繰り返し使用する共通容器や、ス

スマートフォンのアプリで個々の利用状況を記録することでリユースボトルの使用を促進するプログラムなどが挙げられる。そして講義では、プラスチックごみと海洋汚染のつながりが示され、家庭ごみが都市部から河川を通して最終的に海へ到達していることが説明された。また、京都の「京都里山 SDGs ラボ(ことす)」への訪問も特筆すべきものであり、創意工夫によって、より若い生徒にも環境意識を分かりやすく伝える好例となっていた。日本での研修における講義を通じて、環境課題に取り組むには、継続的な努力、市民の支持、十分な資金、そして実質的な前進を後押しする強固な制度的基盤が必要であることを学んだ。またこの研修を通じて、技術的な学びや支え合える環境とあわせて友情と知識を交換できるという点からも、日・ASEAN 協力には大きな価値があることが示された。

フィリピンと日本での訪問、そして他の ASEAN 代表との文化交流を経て、環境意識と持続可能性を若い生徒たちにどのように紹介し、実践し、定着させていくかを明らかにすることが、私たちのグループの焦点として明確になった。そうすることで、彼らは早い段階から問題への理解を深め、自らの解決策を生み出すことに参加できるようになる。設備や施設の充実度にかかわらず、両国に共通して際立っていたのは、地域社会、すなわち人々の関与であることが分かった。若者の参画が重要であることを踏まえつつ、本チームでは、教育を軸としたアプローチによって、次なる変革の担い手となる生徒たちの声をより力強く後押しできると考えるようになった。あらゆる学習者が、環境の持続可能性に関する意識向上に参加できるプログラムを実施し、各国の組織や制度と連携することを通じて、本プロジェクトは、地域との協働という強みを基盤に、教育を通じてより健全な未来につながる日常の実践と習慣を育んでいく。

II アクションプラン

A. 提案された解決策

提案された解決策「より環境に優しい世界に向けた3つのステップ」は、高校生の環境意識と責任ある行動を高めることによって、深刻化するプラスチックごみ問題に対応することを目的とした、教育を軸とする取り組みである。高校生を対象とすることで、プラスチックごみ問題への早期の意識形成を図るとともに、生徒たちが学校や地域社会に働きかける力を身につけられるようにすることを目指している。教育を中核的な戦略とするのは、プラスチック汚染の根本原因である認識と理解の不足に働きかけると同時に、持続可能な行動変容を促すことができるからである。

本プロジェクトは、相互に関連する次の3つのステップで構成される。

- (1) 基礎知識を身につけるためのインタラクティブなテキストブック
- (2) 体験を通じて理解を深める実践型の学習キャンプ

- (3) このキャンプで得た学びを生かし、実社会での実践と創意工夫を促す生徒主導のコンテスト

各ステップは前のステップを補強するように設計されており、意識を意味ある行動へと変えていく連続的な学びのプロセスを確かなものになっている。生徒たちはこの3つのステップを通して学び、将来に向けた実践、習慣、意識を育んでいく。

1. テキストブック — ステップ1

本プロジェクトの第1のステップは、プラスチックごみとマイクロプラスチックに関する基礎知識を生徒に提供する、インタラクティブでストーリー性のあるテキストブックを開発することである。テキストブックであれば、プラスチックごみやマイクロプラスチックのような複雑なテーマを、基本概念から始めて段階的により深い理解へと導く形で説明することができる。情報を断片的に伝えがちなショートフォームメディアとは異なり、テキストブックは内容を論理的な順序で提示するため、生徒たちは原因、影響、解決策を明確に結びつけて理解しやすくなる。テキストブックでは、プラスチックごみの発生源、プラスチックがどのようにマイクロプラスチックへと分解されるか、環境や健康への影響、そしてプラスチック汚染を減らすための実践的な解決策といった主要なテーマを扱う。内容は高校生の年齢層に合わせて作成する。テキストブックには、生徒たちが学んだ内容を自らの日常生活や地域環境に結びつけて考えられるよう促す、振り返りの問いや小さなアクティビティも含まれる。このアプローチにより、生徒たちは、プラスチックごみが地球規模の課題であるだけでなく、自分たちの地域社会の中にも存在する問題であることを理解できるようになる。

実施に当たっては、正確性、妥当性、教育基準との整合性を確保するため、環境分野の専門家や教育関係者と連携してテキストブックを作成する。まず英語のマスター版を作成し、その後、各国で活用できるよう翻訳を行う。テキストブックはデジタル版と印刷版の両方で配布し、学校、学習キャンプ、自主学習などで柔軟に活用できるようにする。このテキストブックを活用することで、環境配慮行動に関する知識を高めることができる。

2. 学習キャンプ

PlastiCamp - 学習キャンプは、このテキストブックを正式な教育課程に提案する前段階として、高校生を対象に本教材モジュールを実施し、とりわけプラスチックごみを中心とする環境問題に関する知識伝達の有効性を検証するための初期的取り組みとして提案されている。正規的教育課程に直接組み込むのではなく、本チームは、3日間のスクールキャンプを、生徒たちがプラスチックごみと環境について学ぶための場として位置づけている。3日間の学習キャンプは大学生によって運営され、プラスチックの基礎と人間および環境への影響、廃棄物か

ら生まれる創造的なイノベーション、そしてプラスチックごみに対処するための効果的な管理といった教材モジュールの目的に沿って実施される。また、包摂性と質の高い教育を促進するため、参加者はすべての地区から高校生を募る。

キャンプ初日は、プラスチックの基礎に関する理解を深める日に充てられる。生徒たちは、専門家による講話を通じて、プラスチックごみやマイクロプラスチック、それらが環境や人間の健康に及ぼす影響について理解を深めることが期待される。さらに、生徒たちはリサイクル拠点と連携したアップサイクル・ワークショップに参加し、プラスチックごみを減らしながら、それを創造的な作品づくりに生かせることへの気づきを得る。これにより、単にプラスチックを排除することだけに目を向けるのではなく、廃棄物を最大限に活用するという視点を広げることができる。

2日目には、生徒たちは、手工芸品、エコブロック、工業製品、5R、エコキャンペーン、廃棄物からのバイオガス生成など、プラスチックごみの削減に取り組む専門家による革新的な解決策や実践に触れる。これは、創意工夫とそれぞれの能力を生かしてプラスチックごみに対処する世界各地の取り組みを示すものである。さらに、イノベーション・ラボでは、生徒たちがグループごとにブレインストーミングを行い、キャンプで学んだことを踏まえて、自分たちの学校をより環境に優しい場に、生徒の間でリサイクル意識を高めるためのアイデアを提案する。このイノベーション・ラボを通じて、生徒たちは技能と創造性を高めるだけでなく、互いに活発に議論することで批判的思考力も養うことができる。

キャンプ最終日には、生徒たちが各自の学校で集めた廃棄物を用いて、経済的価値のあるもの、アート作品、あるいはSTEMに関連するものなど、独自の作品を制作するアップサイクル・コンペティションを行う。さらに、参加者全員に「Guardian of the Earth (地球の守り手)」の称号が授与される。この表彰により、環境を守る責任感が高まり、ひいては学校の友人たちにも、リサイクルやプラスチックごみ削減に向けた環境保全の取り組みへの参加を間接的に促すことが期待される。

3. コンテスト

生徒たちがテキストブックと学習キャンプで学んだことを実践に移すため、このコンテストは、環境配慮行動を促進するうえで自らのスキルを生かす機会となる。#GenZPlasticChallengeは、生徒たちがグループで協力しながら1分間の動画を制作する参加型の動画コンペティションである。このチャレンジの中心テーマは、「持続可能性がいかに創造的で、美しく、楽しいものになり得るかを発見しよう」である。本プログラムは、若者たちが対話に参加し、持続可能性に関する考えを、ごみの削減、低炭素な選択、地域の環境活動への参加といった具体的で日常的な行動へと落とし込んだ映像表現として発信する場を創出することを目的としている。

このチャレンジでは、応募作品を4つの主要な基準に基づい

て評価する。その基準は、第一に創造性、続いて審美的表現、内省、そしてメッセージ性である。これらの基準を通じて、このコンペティションでは、画一的または規範的な語りではなく、参加者自身の価値観や環境問題に対する解釈を反映した表現を重視している。参加者の多様な強みを評価するため、このコンペティションでは3つの賞を設けている。

- ▶ Eco Mind Award — 高い意識と理解
- ▶ Aesthetic Impact Award — 創造性とストーリーテリング
- ▶ Sustainability Hero — 行動変容を促す力を持つ、心を動かす動画

受賞者には、学びを実社会での経験へと結びつける、環境に配慮したツアーに参加する機会が提供される。この表彰制度により、参加者は抽象的な議論だけではなく、直接的な関わりを通して持続可能性への理解を深めることができる。この取り組みは、各国の持続可能性に取り組む企業や団体への訪問とも結びついている。参加者がこれらの交流を通じて得た学びを共有するよう促すことで、環境意識を国境を越えて広げることができる。その結果、持続可能性の価値観は、個人の取り組みにとどまらず、世代全体で共有されるムーブメントとして広がっていくことが期待される。

若者向け動画コンペティションの有効性は、既存の事例によっても裏づけられている。例えば、国連気候変動枠組条約（UNFCCC）の 世界ユース映像コンテストには77か国から180件を超える応募があり、受賞動画は YouTube で10万回以上再生された（UNFCCC, n.d.）。この事例は、若者が制作した映像コンテンツが、国際的な可視性と社会的影響力の双方を実現し得ることを示している。同様に、#GenZPlasticChallenge も、若者たちの創造性とデジタルメディアのスキルを生かし、環境問題をより幅広い層に伝える可能性を備えている。

B. プロジェクトの持続可能性の確保

本プログラムの特徴の一つは、「グリーン投資の循環」にあり、学び、生産、そして仲間主導の支援が、時間の経過とともに相乗的に積み重なっていくよう設計されている。参加者は、環境リテラシーと視覚的ストーリーテリングの技能を身につけ、行動を促す明確なメッセージを伴うコンテンツを発信した後、「Guardian of the Earth」として修了生の役割へと移行する。守り手は、発信（ネットワークを通じてメッセージを広めること）、支援（プロジェクトの設計と実施を支えること）、承認（行動に基づく達成を認めること）という、体系化された3つの役割を担いながら活動し、各期の参加者が次の期に向けて、再利用可能な資源とより強固な支援体制を残せるようにしている。これにより孤立が軽減され、環境配慮行動を持続的に実践できる可能性が高まる。

さらに、このプログラムには、個々の努力や貢献を目に見える形で認める仕組みとして、ユニフォームやメダルが取り入れられている。とりわけ高校生にとって、自らの行動が社会的に認められることは、自己効力感や自信を大きく高める可能性が

ある。参加者は、環境に配慮した行動を義務や負担としてではなく、誇りの源であり、意味のある社会的役割として捉えるよう促される。このメンターシップモデルにおいては、修了生と参加者が、若者同士の連帯感、成長、多様な発想、そして国境を越えた協働を包摂する形で、参画と変化を育んでいくことができる。このように、#GenZPlasticChallenge とそれを取り巻く諸取り組みは、世代を超えた支援と、努力を認め合う文化とを結びつけることで、持続可能で息の長い環境運動を育んでいる。

Ⅲ 実施計画

本プロジェクトは、1学年度の中で8か月をかけて実施する。
本プロジェクトは、次の4つのフェーズに分けて実施する：

A. フェーズ 1：資源動員フェーズ — プロジェクト運営に必要なあらゆる資源を確保する段階。(3か月)

1. ボランティア募集 — 青少年団体と連携して、主に学習キャンプの運営補助を担うボランティアを募集する。この段階で、運営側は学習用テキストブックに関して専門家や実務家にも協力を呼びかける。
2. 資金確保 — プロジェクト支援の一環として、アップサイクルした衣類をユニフォームとして販売し、資金調達的手段とすることで、プロジェクト運営費を賄う。この取り組みは、インドの Ecoline Clothing という企業に着想を得ている。EcoLine Clothing は、使用済み PET ボトルを繊維に変えて T シャツやスポーツウェアを製造するブランドであり、シャツ1枚ごとに複数の再生ボトルが使用され、水とエネルギーの節約にもつながっている (Patel, 2019)。
3. パートナーシップ — 本プロジェクトは、同じ理念を共有し、プロジェクトと関わりのある企業、とりわけ学用品販売、印刷、持続可能な包装に関わる企業や、環境意識の共有と環境保護に取り組む環境団体との連携も目指す。こうした連携により、より幅広い層が、それぞれの形で本プログラムを支援できるようにする。
4. 協働支援 — 本取り組みを学校プログラムとして組み込むため、教育関連部局や教育省庁と連携・協働する。全面実施に先立ち、学校でのパイロットプログラムも実施する。

B. フェーズ 2：準備フェーズ (3か月)

1. インタラクティブなテキストブックを作成する。この過程では、情報収集、執筆とコンテンツ制作、校正、そして専門家による確認を行う。
2. このフェーズでは、学習キャンプの準備も行い、ボランティアがインタラクティブなテキストブックに

基づいて構成したレッスンプランの実施方法を検討する。

C. フェーズ 3：PlastiCamp — プラスチックごみをテーマとする学習キャンプ／ワークショップ (1か月)

このフェーズでは学習キャンプを開始し、その実施には3～5日間を充てる。各日には、テキストブックの流れに沿った専用のモジュールと活動を配置する。テキストブックの配布は、学習キャンプ実施の1週間前に行う。

- ▶ 1日目 = モジュール1・2
- ▶ 2日目 = モジュール3
- ▶ 3日目 = イノベーション・ラボ、展示、コンテスト

D. フェーズ 4：事後対応期間 (1か月)

このフェーズでは、生徒たちにコンテスト用の動画を制作するための3週間が与えられる。その後、審査期間に入り、選ばれた受賞者はサステナビリティ・ツアーに招待される。

Ⅳ 期待される成果とインパクト

A. 2050年に向けたビジョン

ASEAN と日本における最も差し迫った課題の一つがプラスチックごみである。これは家庭、学校、地域社会において継続的に存在する問題であり、対処するには社会全体で取り組む必要がある。現在の廃棄物管理の実践は断片的であり、リサイクル制度にも一貫性がなく、環境教育もカリキュラムに十分組み込まれていないことが多い。こうした現状と2050年に向けた私たちのビジョンとの隔たりを埋めるために本プログラムは設けられており、持続可能性を日常生活の一部として定着させる、若者中心の取り組みの緊急性を浮き彫りにしている。2050年までに、ASEAN と日本の全域で環境変革を主導し、それを持続可能なものとして根づかせる若い世代を育成することが、このビジョンである。学校は持続可能な実践の象徴として位置づけられ、生徒主導の取り組みが国の廃棄物政策に影響を与え、地域社会では教育とイノベーションを通じてプラスチックごみの削減が積極的に進められている姿が描かれている。主たる使命は、生徒たちが自らの環境に責任を持ち、持続可能性を自然な行動として身につけられるよう後押しすることである。

B. 短期的な成果

評価および持続可能性の観点から、本プログラムの有効性を測るうえで役立つ短期的成果を以下に示す。まず、プログラムの測定可能な成果については、事後テストと参加型活動の2つの側面から評価を行う。第一に、事後テストでは、生徒がさまざまな種類のプラスチックとその影響を識別できるかを確認するための調査を実施する。第二に、質問票を用いて、生徒が日常生活の中で使い捨てプラスチックの削減にどの程度意欲を

持っているかを把握する。目標としては、少なくとも75%の生徒が、プラスチックの種類、廃棄物処理の方法、環境保全について理解を深めることを想定している。参加型活動は、ワークショップとコンテストを通じて実施する。PlastiCampのワークショップでは、アップサイクル製品や学校単位での取り組みが生まれることが期待される。また、#GenZPlasticChallengeでは、創造的な動画投稿を通じて幅広い参加を促す。初回の参加者については、少なくとも40人の生徒が応募し、環境保護やプラスチック削減への意欲を示すことを目標としている。生徒たちの意欲を維持するため、Eco Mind Award、Aesthetic Impact Award、Sustainability Hero Awardといった賞を設け、優れた取り組みを顕彰することで、参加意欲を強化し、継続的な実践を促す。

C. 長期的な成果

継続的に実施していくことで、体系的なインパクトが今後5年間のうちに確認できることは間違いない。このテキストブックは、通常の学業に加えて生徒が幅広く参加できる学習活動として、学校のカリキュラムに組み込むことが可能である。また、「Guardians of the Earth」の修了生ネットワークが、新たな世代の参加者に対するメンター役を担うことで、継続性と持続可能性が確保される。生徒主導のプロジェクトやコンテストが実施され、それらが有効なものと認められ、学校や教育を所管する省庁との連携による支援が得られれば、やがて地域政策にも影響を与えるようになる。2035年までには、リユースボトルの利用やごみの分別といった実践が学校内で当たり前のものとして定着することが主な目標となる。そして2050年までには、日・ASEANの若者が、プラスチックごみ削減のリーダーとして認識されるだけでなく、使い捨て製品の消費を測定可能な形で減少させることにも貢献している姿を目指す。本プロジェクトは、短期的な成果が、若者と持続可能性をめぐる長期的な文化的・制度的変化へと発展していく過程を示している。

参考文献など

- Ajzen, I. (1991年) . The theory of planned behavior. (計画行動理論) .Organizational Behavior and Human Decision Processes, 50(2), 179–211. [https://doi.org/10.1016/0749-5978\(91\)90020-T](https://doi.org/10.1016/0749-5978(91)90020-T)
- Evans, G. W., Brauchle, G., Haq, A., Stecker, R., Wong, K., & Shapiro, E. (2007年) . Young children's environmental attitudes and behaviors. (幼い子どもの環境に対する態度と行動) .Environment and Behavior, 39(5), 635–659. <https://doi.org/10.1177/0013916506294252>
- Frick, J., Kaiser, F. G., & Wilson, M. (2004年) . Environmental knowledge and conservation behavior: Exploring prevalence and structure in a representative sample. (環境知識と保全行動：代表サンプルにおける普及状況と構造の検討) .Personality and Individual Differences, 37(8), 1597–1613. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2004.02.015>
- Heidbreder, L. M., Bablok, I., Drews, S., & Menzel, C. (2019年) . Tackling the plastic problem: A review on perceptions, behaviors, and interventions. (プラスチック問題への取り組み：認識・行動・介入に関するレビュー) .Science of the Total Environment, 668, 1077–1093. <https://doi.org/10.1016/j.scitotenv.2019.02.437>
- Patel, T. (2019年9月20日) . Grab this T-shirt & you recycle 12 PET bottles and save 2700 litres of water! (このTシャツを手に入れば、PETボトル12本を再利用し、2,700リットルの水を節約することができる!) .The Better India. (より良いインド) .<https://thebetterindia.com/196978/lifestyle-plastic-recycled-eco-friendly-shirts-pollution-save-water-order-online/>
- 国連環境計画【UNEP】. (2023年) .Turning off the tap: How the world can end plastic pollution and create a circular economy. (蛇口を閉めよ：世界はいかにしてプラスチック汚染を終わらせ、循環型経済を実現できるか) .UNEP. <https://www.unep.org/resources/turning-off-tap-end-plastic-pollution-create-circular-economy>
- 国連気候変動枠組条約【UNFCCC】(n.d.) .Global Youth Video Competition Events (グローバル・ユース・ビデオ・コンペティション関連イベント) . <https://unfccc.int/topics/education-and-outreach/events--meetings/global-youth-video-competition>

V 資料サンプル：

A. テキストブック見本 (レイアウトおよびモジュール内容)

B. 動画コンペティション見本

TraSure

(Trash to Treasure : ごみから宝物へ)

Member

Fauzan Abdullah Azzam
皿井 楓

Then Min Han
Thanawit Karnjanapinyoying

Pham Quynh Nhu

I はじめに

A. 背景

プラスチックごみは、ASEAN 諸国に共通する課題であり、とりわけ観光地において深刻である。例えばベトナムでは、観光開発の進展と同じ速度で、プラスチック製品への需要が増加している (Tran, Pham, & Nguyen, 2020)。TASC でのさまざまな経験から得た学びを踏まえ、私たちは、観光を通じて意識啓発を図りつつ、環境への影響と社会的現実とを結びつけるために、再生プラスチック製の土産物を制作することを決めた。各土産物には「TraSure」のエコラベルを付し、製造時に削減されたと推定されるプラスチックごみの量を含む、簡潔な環境情報を表示する。このラベルには QR コードも付されており、「TraSure」公式ウェブサイトへアクセスすることで、材料調達、再資源化の工程、全体的な環境影響に関する、より詳細なデータを確認できる。サステナビリティに関するデータを製品そのものに組み込むことで、この土産物は単なる商品にとどまらず、購買行動を意識的な環境配慮行動へと変える学びのツールとして機能する。

私たちは、再生素材の土産物を、代替案としてではなく、構造的な解決策として選んだ。観光において、消費は避けられない。私たちは、消費を止めようとするのではなく、そのあり方をそのものを再設計する。プラスチックごみを土産物へと変えることで、私たちは消費を責任と結び直し、観光客を循環型システムの一部にしていく。

プラスチックは用途が極めて広く、私たちの日常生活において必要不可欠な要素となっている。サーモプラスチックやサーモセットなどに由来するプラスチックごみは容易には分解されず、一次的な環境汚染を引き起こしながら大量に蓄積するおそれがある (Damayanti et al., 2022)。東南アジア諸国では、不適切に管理されたプラスチックが年間150万トン以上発生している。マレーシア、タイ、ベトナム、フィリピン、インドネシアは、不適切に管理されたプラスチックの発生量が最も多い国の上位10か国に含まれている (Ng et al., 2023)。日本では、1人当たりのプラスチック消費量が他国よりも多い (Hoshika & Saito, 2020)。私たちのモデルが実際にどのように機能し得るかを示すため、東京でも特に多くの人が訪れる地区の一つで

ある渋谷を事例として取り上げる。2025年に渋谷区が、渋谷、甲州街道、原宿、恵比寿、代々木におけるごみの量と種類を分析した調査によれば、渋谷では、たばこ関連ごみやプラスチック包装などのごみの量が最も多かった (Shibuya City, 2025)。さらに渋谷では、路上飲酒や故意のポイ捨てへの対策のために、毎年多額の予算が投じられている。区長は、2025年12月18日に行われたインタビューにおいて、オーバーツーリズムに対するより広範な対策が必要であると述べている (The Nikkei, 2025)。こうした諸課題を踏まえ、一般財団法人渋谷区観光協会は「Sustainable Shibuya Project」を立ち上げ、観光客の混雑やマナー違反を踏まえた新たな観光のあり方を提示している。同協会は、地域経済に貢献し、地域住民の暮らしを守る新しい観光のあり方を後押しすることを目指している (一般財団法人渋谷区観光協会, 2023)。これらの点を踏まえると、渋谷は、オーバーツーリズムやごみ問題に対応する持続可能な取り組みを進めているという点で、注目に値するといえる。

B. TASC から得た着想

フィリピンのオランゴ島を訪れた際、私たちはプラスチックごみがマングローブ生態系に直接廃棄され、野生生物を脅かすとともに、環境意識の低さがもたらす結果を目の当たりにした。バセコ地区では、住民たちが非常に低い賃金で、手作業によるプラスチックごみの選別に従事している実態を、私たちは目にした。彼らの仕事は、リサイクルの仕組みを支えていたにもかかわらず、十分な評価も公正な対価も得られていなかった。これらの経験を通じて、プラスチック危機は単なる環境問題ではなく、責任と価値が不均等に配分されている社会的・経済的問題でもあることが分かった。

一方、京都府亀岡市への訪問を通じて、環境に関する取り組みは、日常生活に組み込まれ、地方自治体と民間企業の連携によって支えられるときに、持続可能なものとなり得ることが示された。サステナビリティの取り組みには、経済的に成り立つことに加え、社会的に人々を巻き込む力も必要であると私たちは学んだ。

これらの学びに着想を得て、私たちは、地域で回収されたプラスチックごみを、渋谷のような観光地を表現したキーホルダーなどの土産物へと生まれ変わらせることを提案する。再資源化可能な原材料を域外へ搬出するのではなく、地域の中で付

加価値を生み出すことにより、このモデルは、不適切に管理されるごみを減らすとともに、より公正な経済的利益を生み出し、廃棄物処理に従事する人々の尊厳を回復する。

C. 2050年に向けたビジョン

1. ごみを生まない観光

- ▶ 主要な観光地のすべてが「Trash to Treasure (TtT)」に参加し、ごみを最大限に活用しながら、環境に配慮した観光商品を生み出している。
- ▶ プラスチックごみが同一都市内で回収・選別・アップサイクルされ、その利益が都市そのものに還元されている。

2. ごみ問題に対する意識向上

- ▶ 人々が、TraSure の提供する環境活動を通じて環境意識を高めるとともに、私たちのごみのアップサイクル工程にも参加している。
- ▶ 観光客は、「If you buy our product, you save the world (私たちの商品を買うことが、世界を救うことにつながる)」という私たちの主要キャンペーンに共感し、より環境に優しい土産物を選ぶようになっている。

の地域におけるプラスチックの過剰消費が引き起こす環境問題への意識を高め、行動を促したいと考えている。

TtT は、開始フェーズと拡大フェーズ(表1)という2つの主要段階を設け、広範な地域で展開することを予定している。開始フェーズの対象都市は、TraSure チームメンバーの出身国であるインドネシア、日本、マレーシア、タイ、ベトナムを基に選定している。これらの国々には毎年非常に多くの観光客が訪れ、その結果、大量のプラスチックごみが発生している。だからこそ、私たちはまず、これらの国の観光都市で当該プロジェクトを開始することを目指している。立ち上げフェーズで開始されたプロジェクトが安定し次第、拡張フェーズを順次展開していく予定である。

表1. TraSure プロジェクトの対象都市

フェーズ	対象都市		開始時期
	国	都市名	
開始フェーズ	タイ	バンコク	2026年後半
	マレーシア	ペナン	2026年後半
	ベトナム	ハノイ	2026年後半
	インドネシア	ジャカルタ、バリ	2026年後半
	日本	東京、大阪	2026年後半
拡大フェーズ	ASEAN すべての観光都市		2028年

当該プロジェクトは、まず私たちの小規模なチームが広報活動を通じて対外的な働きかけを行うことから始まる。私たちは NGO として、以下のような方法で当該プロジェクトを展開していく：

1. 地域住民向け環境活動の推進

これは、表1に示した最初の対象都市、主として観光都市に暮らす地域住民を巻き込み、それぞれの都市で生じているプラスチックごみの問題に焦点を当てるキャンペーンである。本キャンペーンの活動例として、以下のようなものが挙げられる：

- ▶ **大規模清掃活動**：地域住民はボランティアとして応募し、私たちとともに都市の複数の場所でプラスチックごみを回収する「シティープロテクター」として本プロジェクトに参加できる。参加者には、回収したごみの重量に応じて報酬が支払われる。
- ▶ **家庭内分別**：地域住民は会員登録を行うことでごみ分別用バッグを受け取り、家庭内でプラスチックごみを分別したうえで私たちのもとへ持参することができる。再資源化可能なプラスチックごみを分別して持ち込んだ場合には、報酬が支払われる。

2. 学校および教育機関との連携

TraSure は一過性のプロジェクトではなく、次世代の環境意識を育むことも目指している。当該プロジェクトは、対象都市

II アクションプラン



図1. TraSure ロゴ

A. TraSure & Trash to Treasure (TtT)

世界各地の社会において、さまざまな環境キャンペーンが展開されている。その多くは、地域住民の自発的な参加を促し、地域の清掃活動や環境配慮型のプロジェクトの推進につなげることを目的としている。だが、いくつかのキャンペーンでは社会に持続的な変化が生まれにくく、プロジェクト終了後には、地域住民の環境問題やキャンペーンの目的に対する関心も薄れてしまうことが分かった。そこで私たちは、従来とは異なる方法を模索し、「Trash to Treasure」(図1)を考案した。

Trash to Treasure とは、私たちの団体「TraSure」が立ち上げる本構想の中核を成すキャンペーンである。私たちはこのキャンペーンを通じて、地域住民と観光客の双方に対し、特定

の小学校、高等学校、各種教育機関、大学と連携し、生徒・学生が廃棄物管理に参加できる課外活動を創出するとともに、参加者一人ひとりにプラスチックごみに関する意識を育むことを目指している。

地域住民から集めたプラスチックごみはすべて、その後アップサイクルし、さまざまな種類の土産物として新たな製品へと生まれ変わらせる。

B. アップサイクルの工程

使用済みプラスチックを地域を象徴する新たな土産物へとアップサイクルすることは、循環経済の強化に向けた重要な戦略である (Yoshida et al., 2026)。アップサイクルとは、廃材やごみを、元の形態よりも高い価値を持つ製品、いわば「宝物」へと変えていく一連の工程を指す (Boonpracha et al., 2024)。この工程は、ビーチや市街地、文化的ランドマークなどの観光地に捨てられたプラスチックごみを、観光客による廃棄物として回収することから始まる (Abdulkadir et al., 2025)。次に、回収したプラスチックは、加工時の品質をより高めるため、種類ごとに分別される (Alaghemandi, 2024)。分別後、プラスチックは汚染物質を取り除くために洗浄される。

洗浄されたプラスチックは、その後、機械的に細かなフレーク状に破碎され、さらに溶融されたうえで、地域文化や象徴的なシンボル、ランドマークを反映した形に成形される (Al-Salem et al., 2009)。さらに、見た目の美しさを高めるため、成形された製品には研磨や彩色が施され、視覚的にも魅力あるものに仕上げられる (Singh et al., 2017)。最後に、「TraSure」公式ウェブサイトリンクするQRコード機能付きの「TraSure」タグを、環境保護ラベルとして取り付ける。このラベルは、サステナビリティに関するメッセージを利用者に直接伝えることで、地球規模の環境意識を広げる有効な媒体として機能する (Van der Velden et al., 2014)。

このアップサイクルの手法 (図2) は、ごみから作られた単なる土産物を、サステナビリティを象徴する世界的なシンボルへと変える。観光客は多様な文化的・国民的背景を持つため、再生素材の土産物がそれぞれの母国へ持ち帰られることで、サステナビリティに関するメッセージは、より広い世界の人々へと届くことになる。添付されるエコラベルには、簡潔な環境メッセージが記載され、土産物の製造を通じて削減されたプラスチックごみの量が示される場合もある。これにより、再生製品を購入することの前向きな環境効果が可視化される。自らの行動による具体的な効果が示されることで、消費者は、自身がプラスチックごみ削減の取り組みに貢献していることを、より強く意識するようになる。さらに、QRコードは英語とその地域の現地語の両方に対応した公式ウェブサイトへとつながっており、地域を越えて明確な理解を促す。

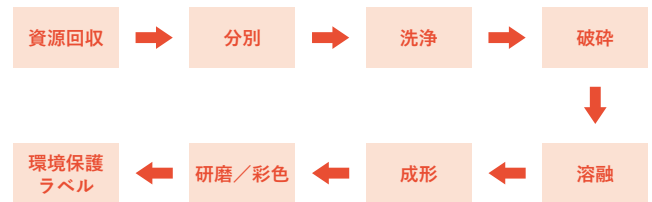


図2. プラスチックごみを地域を代表する土産物へと変えるアップサイクル工程のフローチャート

C. 期待される成果

この取り組みを通じて、TraSure は、国連の持続可能な開発目標 (SDGs) に沿った、拡張可能なインパクトの創出を目指している。私たちの取り組みは、環境面での変化と責任ある消費を促進するよう設計されており、とりわけ以下に焦点を当てている：

- ▶ SDG 11 (住み続けられるまちづくりを)：ワークショップ、イベント、能力強化を通じて包摂的かつ持続可能な取り組みを推進し、地域のリサイクル能力を強化する。
- ▶ SDG 12 (つくる責任つかう責任)：効率的な資源管理とごみ削減戦略を通じてプラスチックごみの負荷を減らし、協働的なアプローチによって地域住民と観光客の双方を力づける。
- ▶ SDG 15 (陸の豊かさを守ろう)：地域の遺産や観光資源の保全を確かなものとするため、衛生的な環境を保護し、回復する。

したがって、本取り組みは、観光客によって生じたプラスチックごみの管理に重点を置き、地域社会がそれを再資源化して持続可能な観光土産へと転換できるよう支援することで、以下の目標の達成を目指している：

1. 環境意識の高い観光客

当該プロジェクトは、リサイクルされた廃棄物を用いて作られた環境に優しいお土産の購入を観光客に促すことで、環境配慮行動の変容を後押しする。Paul and Roy (2023) の概念的枠組みによれば、ある場所に対する情緒的な関わりは、生態学的フットプリントを最小化し、その土地らしさへの理解や評価を高めうるとされている。当該取り組みは、この考え方を踏まえ、観光客と訪問先との間に同様のつながりを育むことを目指している。観光客は、その場所で生じた廃棄物から作られた土産物を購入することで、単に商品を買うだけでなく、保全とサステナビリティの物語に参加することにもなる (Wu et al., 2020)。来訪者とその場所の環境的健全性との間に生まれるこの具体的なつながりは、土産物を個人の責任の象徴へと変える。そして、そのことが来訪者の関与を促し、環境意識と行動を高め、持続可能な消費習慣の定着を後押しする。

2. 地域主導の廃棄物管理と MSME の統合

当該プロジェクトは、地域の関係者との戦略的な連携を通じて、零細・小規模・中規模企業 (MSMEs) を直接的に下支え

することを目的とした、地域運営型の廃棄物バンクを構築する (Utomo et al., 2025; Rai Utama et al., 2025)。実施に当たっては、体系化された3段階のアプローチを採用する：

- ▶ 関係者との協議：このプロセスは、地域の代表者や行政機関とのハイレベル協議および「企画提案」の場から始まり、当該活動の目的を地域の政策や実情に整合させる。
- ▶ ニーズの評価：地域のプラスチックごみ問題に関する具体的なデータを収集するため、包括的なベースライン調査を実施し、その後の戦略がデータに基づき、地域の文脈に即したものとなるようにする。
- ▶ 包摂的な能力強化：次に、地域社会に対して技術的知見と廃棄物処理の技能を提供することで、地域住民の参画を確かなものにする。

こうした能力が包摂的で、あらゆる属性の人々にとって利用可能なものとなることで、当該プロジェクトは、外部からの介入を地域内部のエンパワーメントへと転換させていく。さらに、専門的なワークショップ、マーケティング支援、重点的な資金提供を通じて行われる追加支援は、地域における当事者意識を育む。その結果、この参加型の枠組みは、より清潔な生活環境を確保するだけでなく、地域社会の長期的な社会経済的レジリエンスも支えることになる (Utomo et al., 2025; Saavedra et al., 2018)。

3. 収益性の高い循環型経済

当該プロジェクトは、地域で廃棄された素材を高付加価値の工芸品へとアップサイクルするクローズドループ型システムを導入することで、収益性の高い循環型経済を構築する。この文脈において、循環型経済とは、「製品寿命の終わり」という考え方に代わる再生型のシステムを指し、生産、流通、消費の各段階において、削減・再使用・再資源化の活動を含むものである (Lacy & Rutqvist, 2016)。キーホルダーのような再生品を高付加価値の土産物へと高めるため、当該プロジェクトでは、素材の固有の由来を際立たせる「エコラグジュアリー」な工芸性と限定版デザインを重視する。このモデルによって期待される具体的な成果の一つは、地域の所得源の多様化である。例えば、地域住民に対し、プラスチックごみを地域の遺産をテーマとした特産品へと転換する技能を身につけてもらうことで、当該プロジェクトは、自然資源を枯渇させることなく、環境上の負担を経済的資産へと変える専門的なグリーン雇用を創出する (Utomo et al., 2025; Utama et al., 2025)。

D. エコシステムマップ

エコシステムマップ (図3) とは、システム内における主要なステークホルダー、相互関係、ならびに資源・情報・価値の流れを示す視覚的な表現である (Interaction Design Foundation, 2021)。これは、プロジェクト環境の中で、さまざまな主体がどのように相互作用し、互いに影響を及ぼし合うのかを明確にするのに役立つ。TraSure の取り組みにおいて、

エコシステムマップは、各実施段階を詳述する前に、ステークホルダーの役割、マテリアルフロー(廃棄物の回収から製品流通まで)、および潜在的なレバレッジポイントやボトルネックを特定するための分析ツールとして機能する。



図3. 「Trash to Treasure」(TtT) イニシアティブのエコシステムマップ

ステージ1：回収

国内外の観光客および地域住民によって生じたプラスチックごみ(特にPETボトルおよびHDPE容器)を、渋谷区で回収する。渋谷がTrash to Treasure (TtT) イニシアティブの実証地域として選定されたのは、来訪者が非常に多く、商業活動が密集しており、さらにオーバーツーリズムに伴うごみ問題が継続的な課題となっているためである (Sekarani & Widiandari, 2022)。地方自治体は、リサイクル用ボックスなどの回収インフラを整備し、定期的な清掃活動や回収キャンペーンを実施することで、この段階を支援する。参加を促すため、ささやかな金銭的インセンティブが提供される。これは、先行研究において、経済的報酬が家庭や地域におけるリサイクル行動に肯定的な影響を与え得ることが示されているためである (Okon Recycling, 2025)。

ステージ2：分別

回収されたプラスチックは、地域の作業場または指定の分

別施設へ運ばれる。そこで、生徒や若年のボランティアが、ごみを材質ごとに分別する（例えば、PET ボトル、HDPE 容器、および類似のサーモプラスチックなど）。ポリエチレン（PE）や PET のようなサーモプラスチック材料は、溶融して新たな製品へと再成形することができる。生徒をこの分別工程に参加させることで、当該プログラムはそれを環境意識を高める実践的な学習活動へと転換している。この教育的関与はまた、適切に分別された高品質のプラスチックだけがアップサイクル工程へ進むことを確かなものとし、その結果、処理効率と最終製品の品質向上にもつながる。

ステージ 3 : アップサイクル

地域のアップサイクル拠点では、分別されたプラスチックを十分に洗浄し、機械的に処理する。破砕、溶融、成形のための設備を用いて、廃棄されたプラスチックは新たな製品へと生まれ変わる。例えば、リサイクルされた PET ボトルは、溶融および再成形を経て、家庭用品や土産物といった実用品または装飾品に生まれ変わり、廃棄物の創造的再利用を示すことができる。地元の職人やソーシャル・エンタープライズは、こうした製品の設計において若い参加者と協働することが多く、かつてはゴミ捨てされたものから価値ある新製品を生み出せることを示している。

ステージ 4 : 教育と参加促進

教育と地域社会の参加促進は、TtT エコシステム全体を支える基盤となっている。地方自治体、学校、地域団体、NGO が連携し、適切なごみ分別とアップサイクルを促進するワークショップ、展示、公開イベントを実施する。重要なのは、国際的な来訪者が地域のごみ処理ルールを理解できるよう、多言語による周知活動が行われる点である。また、若い参加者は、学んだ実践を各家庭や地域社会の中で広めていく（Chen, 2025）。

ステージ 5 : 製品流通

アップサイクル製品は、地元の小売店や観光向け販売拠点を通じて流通する。観光客は環境に配慮した土産物を購入し、その売上が当該プログラムの継続を支える収益となる。製品が地域外へ持ち出される可能性があるため、資源循環は完全には閉じていないものの、これらの製品に組み込まれた環境価値は、当該プロジェクトの影響を世界へと広げていく（Japan-Property, 2023）。

プラスチックごみの品質と汚染である。観光客によって捨てられたプラスチックには、食品残渣や再資源化できない素材が混在していることが多く、そのため分別や洗浄の工程がいったん複雑になり、より多くの労力と費用を要する。この課題の背景には、異なる文化的背景や環境意識を持つ観光客の間で、ごみの分別行動にばらつきがあることが考えられる（Hu et al., 2024）。

さらに、アップサイクル工程に必要なプラスチック原料を安定的に確保し、生産および「Trash to Treasure」全体のサプライチェーンを維持するためには、地域社会の関与と長期的な参加を確保することが重要な課題である。金銭的インセンティブや課外活動は、一部の地域住民や生徒の参加を引きつけることで、プラスチック回収量の不足をある程度緩和し得るものの、長期的な関与を維持するためには、プラスチックごみを負担ではなく共有された責任として捉えるよう、地域社会の認識を転換していく必要がある（Yoshida et al., 2025）。

加えて、技術的な制約も障壁となる。とりわけ東南アジア地域では技術の高度化が十分でないため、プラスチックのアップサイクルに通常必要とされる高品質な生産のための先進的な機械設備や専門技術を活用しにくく、土産物への転換工程が制約を受ける。近赤外分光法（NIR）や摩擦帯電選別（TBS）、摩擦静電分離といった高度な選別技術は、プラスチックを迅速かつ正確に分離することを可能にするが、こうした技術は一部の開発の遅れた地域では導入しにくい場合が多く、そのことがアップサイクル工程の拡張性に影響を及ぼす可能性がある（Alaghemandi, 2024）。

B. 今後の計画

運営上の課題に対応するため、「Trash to Treasure」では、持ち込み拠点における標準化された分別と洗浄を通じて、投入されるプラスチックの品質と回収の信頼性を高め、汚染を減らすとともに、後続工程の処理効率を向上させていく（Hopewell, Dvorak, & Kosior, 2009）。参加の安定化は、ささやかなインセンティブと、学校および地域社会が継続的に主導するワークショップを組み合わせることで図られる。というのも、長期的な廃棄物対策は、地域の制度や社会的ネットワークに組み込まれたときに、より持続しやすくなるからである（Iyer, 2001）。これと並行して、当該プロジェクトは、製作に関する専門知識や適切な機械設備を活用するため、大学、ソーシャル・エンタープライズ、民間企業との連携を進める。これは、処理能力の制約によって、再生プラスチックの活用がしばしば低付加価値の用途にとどまってしまうことを踏まえたものである（Almack, 2017）。

渋谷以外へと展開を広げるに当たり、このモデルは、地域ごとのごみの実態、観光の傾向、利用可能なインフラに応じて、回収物流、製品設計、コミュニケーションのあり方を調整することで、ASEAN 各地の文脈に適応させていく。この地域的な方向性は、プラスチック流出の削減、回収体制の強化、再生資源からの価値創出の拡大という ASEAN の優先課題とも整合し

Ⅲ 考察

A. 課題

アクションプランの設計および提案された実施内容を通じて、いくつかの課題が明らかになった。主な課題の一つは、プ

ている (ASEAN Secretariat, 2021)。サステナビリティを確保するため、「Trash to Treasure」は、地方自治体や小売事業者と連携したマルチステークホルダー型のガバナンスを制度化するとともに、アップサイクル教育を若者向けプログラムへ段階的に組み込み、訓練を受けたボランティアと地域の賛同を継続的に確保していく (Almack, 2017)。

Ⅳ 結論

長年にわたり、観光部門が生み出すプラスチックごみの問題は、環境悪化、社会的公正、都市ガバナンスが交差する複雑な課題をもたらしてきた。Trash to Treasure (TtT) イニシアティブの構築を通じて、当該プロジェクトは、渋谷のような観光客の多い都市部におけるプラスチック汚染に対しては、地域社会の参加、経済的インセンティブ、教育、持続可能な設計を結びつける学際的なアプローチが必要であることを示している。ASEAN 諸国および日本における綿密な観察と比較検討を踏まえ、当該プロジェクトは、プラスチックごみを単なる環境負荷としてではなく、循環型経済の原則によって新たな価値を与え得る資源として捉えている。

プラスチックごみを地域で製作される土産物へと転換することで、Trash to Treasure は廃棄物管理と観光を結びつけ、観光客が受動的な関与者から持続可能性の実践に積極的に参加する主体へと移行することを可能にする。同時に、この取り組みは、廃棄物管理のエコシステムの中に環境教育、技能開発、経済的価値を組み込むことで、地域社会の自立を促進している。提案されたアップサイクル工程とエコシステム・モデルは、行政、地域社会、個人の協働が、環境的価値と社会経済的価値の双方を持続させる仕組みをいかに生み出し得るかを示している。

ごみの品質、技術力、地域社会の継続的な関与に関する課題は依然として残るものの、当該プロジェクトは、ASEAN 地域全体における適応と展開拡大に向けた実現可能な道筋を示している。Trash to Treasure は、都市観光のシステムの中で、ごみ削減、地域社会の参加、価値創出を統合する実践的なモデルを提示している。2050年を見据え、このイニシアティブは、プラスチックごみが地域で管理され、意味のある製品へと転換され、より持続可能で包摂的な都市環境の一部として日常的な観光実践の中に組み込まれている観光地を支えていくことを目指している。

参考文献など

- Abdulkadir, A., Ally, B., Remmen, A., Hirsbak, S., & Salukele, F. (2025年). *Plastic waste management practices in Zanzibar's coastal tourist communities*. (ザンジバルの沿岸観光地域におけるプラスチック廃棄物管理の実践). *Sustainability*, 17(21), Article 9692. <https://doi.org/10.3390/su17219692>
- Alaghemandi, M. (2024年). *Sustainable solutions through innovative plastic waste recycling technologies*. (革新的なプラスチック廃棄物リサイクル技術による持続可能な解決策). *Sustainability*, 16(23), 10401. <https://doi.org/10.3390/su162310401>
- Almack, A. (2017年7月3日). *Why are plastic recycling rates so low? Plastics For Change*. (なぜプラスチックのリサイクル率はこれほど低いのか？プラスチックで変える). <https://www.plasticsforchange.org/blog/category/why-are-plastic-recycling-rate-so-low>
- Al-Salem, S. M., Lettieri, P., & Baeyens, J. (2009年). *Recycling and recovery routes of plastic solid waste (PSW) : A review*. (プラスチック固形廃棄物 (PSW) のリサイクルおよび回収ルート：レビュー). *Waste Management*, 29(10), 2625–2643. <https://doi.org/10.1016/j.wasman.2009.06.004>
- ASEAN Secretariat. (2021年). *ASEAN regional action plan for combating marine debris in the ASEAN member states (2021–2025)*. (ASEAN 加盟国における海洋ごみ対策のための ASEAN 地域行動計画 (2021–2025 年)). <https://asean.org/book/asean-regional-action-plan-for-combating-marine-debris-in-the-asean-member-states-2021-2025-2/>
- Boonpracha, J., Chanplin, P., Ngampipat, C., & Sermisri, N. (2024 年). *Upcycling for repurposing waste into creative products*. (廃棄物を創造的な製品へ転換するためのアップサイクル). *Creativity Studies*, 17(1), 192–206. <https://doi.org/10.3846/cs.2024.18128>
- Chen, S.-H. (2025年12月15日). *Students embrace and drive recycling awareness in Japan*. (日本で学生たちがリサイクル意識を受け入れ、推進する). Tzu Chi Foundation. <https://global.tzuchi.org/students-embrace-and-drive-recycling-awareness-in-japan>
- Damayanti D, Saputri DR, Marpaung DSS, Yusupandi F, Sanjaya A, Simbolon YM, Asmarani W, Ulfa M & Wu H-S. (2022年). *Current Prospects for Plastic Waste Treatment*. (プラスチック廃棄物処理の現状と展望). *Polymers*.2022; 14(15):3133. <https://doi.org/10.3390/polym14153133>
- Hopewell, J., Dvorak, R., & Kosior, E. (2009年). *Plastics recycling: Challenges and opportunities*. (プラスチックリサイクリング：課題と可能性). *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, 364(1526), 2115–2126. <https://doi.org/10.1098/rstb.2008.0311>
- Hoshika, K., & Saito, Y. (2020年). *Economic analysis of plastic waste problems and plastic bag pricing policy*. (プラスチック廃棄物問題とレジ袋有料化政策の経済分析). Doctoral dissertation, Waseda University. <https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/64665>
- Hu H, Zhang Y, Wang C, Yu P. (2024年). *Factors Influencing Tourists' Intention and Behavior toward Tourism Waste Classification: A Case Study of the West Lake Scenic Spot in Hangzhou, China*. (観光地におけるごみ分別に対する観光客の意図と行動に影響を与える要因：中国・杭州西湖景勝地を事例として). *Sustainability*.2024; 16(3):1231. <https://doi.org/10.3390/su16031231>
- Interaction Design Foundation. (2021年10月27日). *What are ecosystem maps?* (エコシステムマップとは何か?). <https://www.interaction-design.org/literature/topics/ecosystem-maps>
- Iyer, A. (2001年). *Community participation in waste management: Experiences of a pilot project in Bangalore, India (Case-study report)*. (廃棄物管理における地域参加：インド・バンガロールにおけるパイロットプロジェクトの経験 (ケーススタディ報告)). WASTE. <https://task36.ieabioenergy.com/wp-content/uploads/sites/34/2016/06/community-participation-bangalore.pdf>
- Japan-Property. (2023年7月11日). *How will Shibuya, which attracts young people and foreign tourists visiting Japan,*

- transform through redevelopment?* (日本を訪れる若者や外国人観光客を惹きつける渋谷は、再開発によってどのように変わるのか). <https://www.japan-property.jp/blog-buy/details37>
- Lacy, P., & Rutqvist, J. (2016年). *Waste to wealth: The circular economy advantage*. (廃棄物から富へ：循環型経済の優位性). Palgrave Macmillan.
 - Ng, C. H., Mistoh, M. A., Teo, S. H., Galassi, A., Ibrahim, A., Sipaut, C. S., Foo, J., Seay, J., Taufiq-Yap, Y. H., & Janaun, J. (2023年). *Plastic waste and microplastic issues in Southeast Asia*. (東南アジアにおけるプラスチック廃棄物およびマイクロプラスチック問題). *Frontiers in Environmental Science*, 11, 1142071. <https://doi.org/10.3389/fenvs.2023.1142071>
 - Nikkei Inc. (2025年12月18日). *Shibuya mayor expresses expectations for Tokyo's accommodation tax, calling for stronger measures against overtourism*. (渋谷区長、東京都の宿泊税に期待を示し、オーバーツーリズム対策の強化を求める). 日本経済新聞. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCC182KN0Y5A211C2000000/>
 - Okon Recycling. (2025年). *What are incentives for community scrap recycling?* (地域のスクラップリサイクルにおけるインセンティブとは何か). <https://www.okonrecycling.com/consumer-recycling-initiatives/community-scrap-drop-off/incentives-for-community-scrap-recycling/>, (参照2026-1-18)
 - Paul, I., & Roy, G. (2023年). *Tourist's engagement in eco-tourism: A review and research agenda*. (エコツーリズムにおける観光客の関与：レビューと研究課題). *Journal of Hospitality and Tourism Management*, 54, 316–328. <https://doi.org/10.1016/j.jhmt.2023.01.002>
 - Saavedra, Y. M.B., Iritani, D. R., Pavan, A. L.R., & Ometto, A. R. (2018年). *Theoretical contribution of industrial ecology to circular economy*. (循環型経済に対する産業生態学の理論的貢献). *Journal of Cleaner Production*, 170, 1514–1522. <https://doi.org/10.1016/j.jclepro.2017.09.260>
 - Sekarani, W., & Widiandari, A. (2022年). *Overtourism and global challenges on environmental issues: A case study of Japanese tourism*. (オーバーツーリズムと環境問題に関する地球規模の課題：日本の観光を事例として). *Proceedings International Conference of Culture and Sustainable Development*. <https://proceedings.undip.ac.id/index.php/icocas/article/view/680>
 - 一般財団法人渋谷区観光協会. (2023年9月25日). *For the region, with the region, and what can be done now: Launch of the "Sustainable Shibuya Project" for the realization of sustainable town development and tourism*. (地域のために、地域とともに、今できること。“持続可能なまちづくり・観光”の実現に向け「Sustainable Shibuya Project」始動!). *PR TIMES*. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/0000000099.000019275.html>
 - Shibuya City. (2025年9月16日). *Street litter distribution survey report: Field survey conducted on August 18, 2025* [PDF]. (渋谷区路上散乱ごみ実態調査報告書：2025年8月18日に実施した現地調査 [PDF]). 渋谷区. https://files.city.shibuya.tokyo.jp/assets/12995aba8b194961be709ba879857f70/2c1a729884764e238504d38179738a94/20251017_takanome.pdf
 - Singh, N., Hui, D., Singh, R., Ahuja, I. P. S., Feo, L., & Fraternali, F. (2017年). *Recycling of plastic solid waste: A state of art review and future applications*. (プラスチック固形廃棄物のリサイクル：最新レビューと今後の応用). *Composites Part B: Engineering*, 115, 409–422. <https://doi.org/10.1016/j.compositesb.2016.09.013>
 - Tran, M. T., Pham, T. L., & Nguyen, X. T. (2020年). *Reducing plastic waste for the competitiveness of Vietnamese tourist attractions*. (ベトナムの観光地の競争力向上に向けたプラスチック廃棄物削減). *E3S web of conferences*, 210, 01011. <https://doi.org/10.1051/e3sconf/202021001011>
 - Utama, I. G.B. R., Trimurti, C. P., Junaedi, I. W.R., & Krismawintari, N. P. D. (2025年). *Transforming tourism in Indonesia: Advancing a green economy for sustainable development and job creation*. (インドネシアにおける観光の変革：持続可能な開発と雇用創出に向けたグリーン経済の推進). *International Journal of Current Science Research and Review*, 8(3), 1418–1433. <https://doi.org/10.47191/ijcsrr/V8-i3-49>
 - Utomo, H. S., Wibawa, T., Suratna, & Handayani, W. P. (2025年). *Exploring circular economy strategies for sustainable nature tourism management*. (持続可能な自然観光管理に向けた循環型経済戦略の探究). *RSF Conference Proceeding Series: Business, Management and Social Science*, 5(2). <https://doi.org/10.31098/bmss.v5i2.984>
 - Van Der Velden, N. M., Kuusk, K., & Köhler, A. (2014年). *Life cycle assessment and eco-design of smart textiles*. (スマートテキスタイルのライフサイクル評価とエコデザイン). *Materials and Design*, 65, 313–321. <https://doi.org/10.1016/j.matdes.2015.06.129>
 - Wu, J., Wei, W., & Fu, X. (2020年). *Tourists' pro-environmental behaviors: Moral obligation or disengagement?* (観光客の環境配慮行動：道徳的義務か、それとも離脱か?). *Journal of Travel Research*, 60(4), 735–748. <https://doi.org/10.1177/0047287520910787>
 - Yoshida, A., Hosoi, Y., Hagiwara, M., Kanezawa, S., & Kayama, T. (2026年). *Evaluating the social value of a marine plastics upcycling project in Japan*. (日本における海洋プラスチックのアップサイクル事業の社会的価値評価). *Environments*, 13(1), 29. <https://doi.org/10.3390/environments13010029>

[MANIBU WARASHI]

Manibu のエコクエスト

カードをめくって世界を変えよう（これやりたい！）

Member

Baginda Muhammad Rif'an Abdillah
能瀬 颯菜Shivabala A/L Ganeish
Marquez Fea Bambina TrinidadPhimsiya Thongyoo
Nguyen Tien Thanh

I はじめに・背景

2020年には、約5,200万トンのマイクロプラスチック廃棄物が、管理されたシステムから、管理の及ばない環境（土地、水域、野焼きなど）へと流出した。さらに、約2,200万トンが未焼却の残骸として環境中に残り、河川や海へ移動するおそれがある状態にあった（Cottom et al., 2024）。この憂慮すべき数値は、若者主導の取り組み、とりわけ協働的かつプロジェクトベースのアプローチが急務であることを示している。フィリピンで実施されたフィールドトリップや講義を通じて、Manibu Warashi チームは重要な示唆を得た。すなわち、8～12歳の子どもは理想的な対象層であるということである。環境プログラムの実施後、年少の子どもたちは、年長の生徒よりも態度の変化が大きいことが多く、長期的な価値観や規範を形成するうえで、とりわけ反応しやすい集団であることが示唆されているためである（Lamanauskas, 2023; Liefländer & Bogner, 2014）。さらに、フィリピンのバランガイ（最小行政単位）、とりわけマニラのバランガイは、教育者の支援を伴う環境教育ツールを導入する場として極めて適している。バランガイは、地域社会に向けた政府のビジョン、事業、施策を実施する最前線の主体であるため、バランガイの機能強化は、より強靱でレジリエントな地域社会の形成につながり得る（Bautista, 2015）。

II ASEAN および日本訪問を通じて得た知見

フィリピンでの現地訪問において、プロジェクトチームは、プラスチックごみ汚染の憂慮すべき規模と、それに対処するためのさまざまな取り組みを目の当たりにした。官民連携と先進技術は、プラスチックごみをレンガなどの副産物へ転換し、循環型経済を促進するうえで重要な役割を果たしていた。地域レベルでは、バランガイの住民たちが、プラスチックごみをバッグや財布などの実用品へと変えるアップサイクルの取り組みを組織することで、そのレジリエンスと適応力を示していた。

しかし、こうした有望な取り組みにもかかわらず、プラスチックごみは依然として憂慮すべき速度で蓄積し続けている。

これは、技術革新や地域に根ざした取り組みだけでは、問題の根本原因に対処するには不十分であることを示している。不適切な廃棄物管理の慣行が続いていることは、環境意識、態度、そして長期的な行動変容に関わる、より深い問題の存在を示している。

これらの観察を通じて、Manibu Warashi チームは、こうしたギャップを埋めるうえで、若者主導の取り組み、特に環境教育を中心とする取り組みが不可欠であると認識した。環境リテラシーを高め、責任ある習慣を幼少期から育むことによって、教育は、長期的にプラスチックごみを削減するための予防的かつ持続可能なアプローチとなり得る。

さらに、日本は、国民の高い規律意識と政府の支援の双方によって支えられる、効果的な廃棄物管理のモデルを示していた。日本では、公共のごみ箱が限られていることや文化的習慣から、市民が自らのごみを持ち帰ることが日常的に行われており、同時に、分別システムにより、ごみは区分ごとに一貫して分別されている。日本の廃棄物管理における成功は、市民参加に支えられた体系的アプローチの有効性を示している。

さらに、当初のアイデアは、東京、京都、大阪、奈良の4地域における日本訪問中に得た専門家からのフィードバックを通じて形づくられた。これらの観察は Manibu エコクエストの設計に直接的な影響を与え、持続可能な変化には早期の環境教育が必要であることを強調している。さまざまな教育手法の中で、私たちがあえてボードゲームを採用したのは、幼い段階からボードゲームを通じて環境問題を導入することにより、対面でのやり取り、議論、協働的な意思決定を促すためである。こうした要素は、子どもたちの社会的責任感や集団的な環境意識を育むうえで不可欠である。アナログのボードゲームは、デジタルゲームと異なり、電力、インターネット接続、個人用端末を必要としないため、学校やバランガイの地域社会にとっても、より利用しやすく適応しやすい。

このインタラクティブで魅力ある形式を通じて、当該プロジェクトは、環境への意識、責任感、持続可能な習慣を育み、環境意識が高く、ごみに関わる課題に取り組む準備ができた未来世代の形成を目指している。

Ⅲ プロジェクト概要： MANIBU WARASHI

Manibu のエコクエストは、環境意識を子どもたちにとって魅力的な冒険へと変えることを目的に設計された、革新的な教育用ボードゲームである。調和と守護を象徴する日本の精霊「座敷童子」に着想を得て、このゲームには、プレイヤーを自然の守り手へと導くヒーローマスコット「Manibu」が登場する。(図1)



図1

Manibu Warashi の有効性は、従来型の指導から遊びを通じた学習へと発想を転換している点にある。このゲームは、罪悪感を抱かせたり退屈な講義に頼ったりするのではなく、没入感のあるストーリーテリングとゲームの仕組みを通じて、持続可能性をわくわくするものとして伝える。80マスにわたる旅の中で、プレイヤーは、単純な善悪の二項対立ではなく、意味のあるトレードオフを伴う現実的な場面に出会う。例えば買い物の場面では、プレイヤーは自分がリユース可能なトートバッグを忘れたことに気づくかもしれない。その場合、プラスチック袋を受け取って Waste Points（廃棄物ポイント）を獲得する代わりに限られた資源を温存するか、あるいは Eco Coins（エコ・コイン）を使って持続可能な代替手段を得るかを選ぶことになる。

このゲームは、子どもたちが地球を守ることを面倒な義務ではなく、皆で勝ち取る達成として捉えられるようにする。(図2)

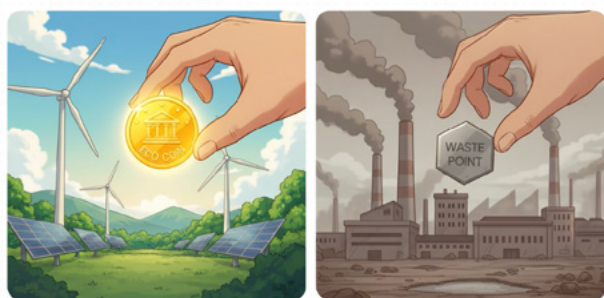


図2

Ⅳ ゲームのコンセプトとデザイン

子ども時代から大人になるまで人生をたどって盤面を進んでいく人生ゲームに着想を得て、Manibu Warashi: EcoQuest（マニブ ワラシ：エコクエスト）では、日々の選択と個人の成長を表す80のマスプレイヤーが進んでいく。一方で、このゲームでは、富や職業上の地位によって成功を測るのではなく、責任ある意思決定、環境意識、そして集団的な影響力を軸に達成を捉え直している。これによりプレイヤーは、日々の小さな行動が、より大きな環境上の成果にどのようにつながるのかを考えるよう促される。

ボードは、年少のプレイヤーにも追やすい、分かりやすく直線的な道筋として設計されている。ボード上の異なるゾーンは、家庭、学校、地域社会、自然空間といった現実世界の環境を表している。エコアイコン、色分けされたマス、シンプルなイラストといった視覚的要素により、プレイヤーは各ステージで求められる行動の種類を素早く理解できる(図3)。ボード、トークン、カード、マニュアルブック、サイコロの制作に再生素材を用いることで、このゲームの持続可能性に関するメッセージはいっそう強化されると同時に、学校や地域社会で活用しやすい価格での製作も可能となる。

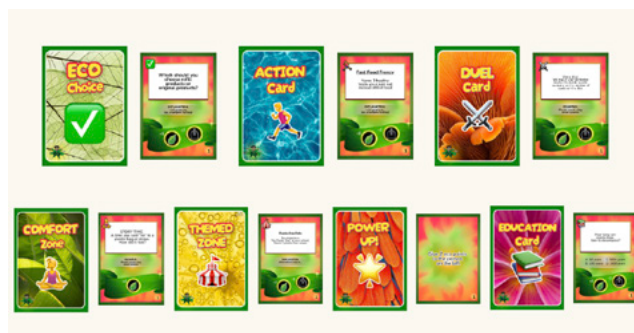


図3

学習目標は、ゲームの仕組みそのものに直接組み込まれている。プレイヤーは、プラスチック使用の削減などの望ましい行動によって Eco Coins を獲得し、有害な行動によって Waste Points が蓄積される。この仕組みにより、抽象的な環境への影響が可視化され、理解しやすくなる。アクション・カード、エコ・ジレンマ、クイズ、ミニゲームは、プレイヤーに批判的に考え、起こり得る結果について話し合うことを促す現実的な場面を提示する。共有の課題やグループでの意思決定を含む協働的な要素は、競争よりもチームワークを促進する。

V 遊び方

A. ボードゲームの構成要素

1. 80マスのゲームボード
2. プレイヤー用のコマ

3. 複数種類のカードデッキ

- a. Eco Choice Cards (エコチョイス・カード) — 環境上のトレードオフや結果を考える必要がある、現実的な日常の選択(例: プラスチック袋かトートバッグか)を提示する。
- b. Action Cards (アクション・カード) — 能動的な参加を通じて持続可能性の概念を強化する、短いミニチャレンジや簡単なクイズを提示する。
- c. Duel Cards (デュエル・カード) — 短時間の対戦型チャレンジや環境知識バトルを通じて、仲間同士の交流を促す。
- d. Comfort Zone Cards (コンフォートゾーン・カード) — 前向きなエコフレンドリー行動を振り返るよう促し、蓄積された Waste Points を減らせるようにする。
- e. Themed Zone Cards (テーマゾーン・カード) — 特定の環境テーマに焦点を当てた特別なチャレンジを提示し、追加ポイントを獲得する機会を提供する。
- f. Power-Up Cards (パワーアップ・カード) — プレイヤーが後で使うために保持できる戦略的な利点を与え、ゲームプレイに計画性の要素を加える。
- g. Education Cards (学習・カード) — 魅力ある学習体験を保ちながら知識を強化するための、短いエコクイズを収録する。

4. マニュアルブック

5. 折りたたみ式サイコロの展開図



図4

B. 遊び方

1. 準備: ボードを中央に置く。全員がコマを1つ選び、Eco Coins 0、Waste Points 0の状態ですtep 0から始める。カードをよく切って、手の届くところに置く。
2. 移動: 自分の番になったら、サイコロを振ってコマを進める。
3. 行動: 止まったマスの記号を確認し、それに対応するカードを取る。
4. 判断: カードの指示に従う。現実的に即した選択をしたり、ミニチャレンジをこなしたりする。よい選択をすると Eco Coins を獲得し、好ましくない選択をすると

Waste Points が加算される。

5. 勝敗: 誰かが80マスへ到達した時点でゲームは終了する。Eco Coins から Waste Points を差し引き、最も得点が高いプレイヤーの勝ちとなる。

Ⅶ 他の教育ゲームとの比較

複数の教育用ボードゲームが、若いプレイヤーに価値観や意識を教えることを目指している。例えば、プラのきもちは感情理解と共感に焦点を当てており、印刷しやすく、シンプルなゲームプレイを通じて、子どもたちが感情や社会的相互作用について振り返るよう促している。同様に、*Go Goals!* は、7～11歳の子どもたちに国連の持続可能な開発目標を紹介し、貧困、健康、教育といった地球規模の課題への意識を高めるために、幅広い目標ベースのアプローチを用いている。

Manibu Warashi: *EcoQuest* は、ゲーム内の問いを東南アジアの生活様式に結びつけることで、これらのゲームとは異なる、より焦点の定まった地域密着型の学習体験を提供している。Manibu Warashi: *EcoQuest* は、サステナビリティを一般論として扱うのではなく、東南アジアの文脈において特に関係の深いプラスチックごみと環境習慣に焦点を当てている。例えば、東南アジア諸国は赤道により近いので、西洋諸国と比べて一般的に湿度が高い。そのため、そこで現実的に取り得る行動のあり方にも、生活様式の違いが表れる。これにより、学習内容はプレイヤーの日常生活により結びついたものになる。また、この人生の旅のような構造によって、プレイヤーは日々の小さな選択が時間とともにどのように積み重なっていくかを理解でき、長期的な思考と責任感が強化される。

Manibu Warashi: *EcoQuest* のもう一つの大きな特長は、協力型であると同時に競争性も備えたゲームプレイにある。多くの教育ゲームが個人の進歩を重視するのに対し、Manibu Warashi: *EcoQuest* は、共有の課題や共同の成果を通じてチームワークを促し、現実世界における環境問題の解決のあり方を反映している。さらに、Eco Coins と Waste Points の仕組みは、即時に目に見えるフィードバックを与えることで、プレイヤーが行動と結果の結びつきを明確に理解できるようにすると同時に、競争の要素も感じられるようにしている。再生素材を用いて設計され、大量生産にも適しているエコクエストは、教室や地域社会での展開に適している。総じてエコクエストは、地域に根ざした環境教育、協働的な学び、そして振り返りを促すゲームプレイを組み合わせ、特にプレティーン層に合わせて設計された形式を採っている点で際立っている。

VII アクションプランとロードマップ

A. 学校における導入

1. 短期（立ち上げ・研修）：10～15校を対象に導入し、300～600人の児童（3～6年生）への実施を目指す。まず Game Mechanic Training（ゲームデザイン講座）から開始し、教員やスタッフが児童向けセッションを進行する前に、先にゲームを体験してルールを十分に理解する。
2. 中期（実施・フィードバック）：11週間にわたり、5～6人のグループに分かれた児童を対象に、90分のセッションを実施する。各セッションには、45分間のゲームプレイ（2～3ラウンド）、ファシリテーターによる観察、そして振り返りの話し合いを含める。毎週の評価と小さな達成報酬により、参加意欲と継続的な改善を支える。
3. 長期（持続可能性・拡大）：児童の参加状況と環境理解を通じて成果を測定する。成果が良好であれば、教材の品質と安全基準を高い水準で維持しながら、新たな地域へ展開を広げる（図5）

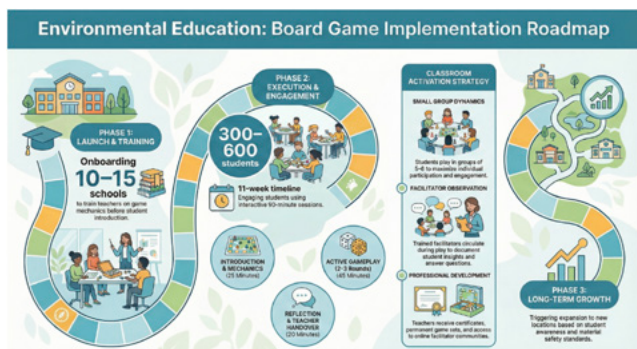


図5

B. 地域における導入

当該プロジェクトは、ボードゲーム体験イベントを通じて、より多くの人々へこのボードゲームを広げるため、地域社会に焦点を当てている。その目的は、子どもたちのプラスチックごみに関する意識と知識を広げること、そして当該ボードゲームを通じて日常行動の変化を促すことである。当該プロジェクトでは、環境問題、プラスチックごみ、教育に関わる団体に加え、地域組織（フィリピンのバランガイなど）との連携を想定している。

1. 事前段階：まず、州ごとにいくつかの団体を特定し、電子メールや文書を通じて直接連絡を取り、当該ゲームの説明と配布を行うことから始める。その後、私たちと協力者がイベントの詳細を策定する。さらに、若者の参加を促すため、大学生および高校生からボランティアを募集する計画である。
2. 実施中のイベント：会場としては、公的施設や学校を

想定している。イベントでは、子どもたちは少人数のグループ（ボード1台につき4～6人）に分かれ、協力者であるファシリテーターとともにボードゲームを行う。

3. 事後段階：イベント終了後、参加者と協力者が質問票を用いてイベントおよびボードゲームを評価し、その結果を踏まえてボードゲームを改善する。

もう一つの計画として、地域活性化の中心的取り組みとして、教育部門および環境部門の長や責任者を対象としたワークショップを開催する。その目的は、ボードゲームを活用しながら、法制度、政策、知識の普及を促進することである。このワークショップを通じて、広範なコミュニケーションの促進が図られる。

VIII 期待される成果

A. 短期的成果

子どもたちの環境問題に対する意識向上

以下に示すとおり、このボードゲームには7種類のカードがあり、多様な要素が組み込まれている。そのため、子どもたちは楽しみながら、プラスチックごみや環境の現状について学び、課題について自分自身で考えることができる。

1. Eco Choice Cards — 子どもたちは、エコフレンドリーな選択肢について知ることができる
2. Action Cards — 子どもたちは日常生活を振り返り、いくつかの助言を得ることができる
3. Education Cards — これらのカードは、事実に基づく情報を提供する
4. Duel Cards — これらのカードは、プラスチックごみに関するクイズを提示する
5. Comfort Zones — これらのカードは、この問題について話し合い、共有することを促す
6. Power-Ups — これらのカードの一部は、この問題について考えるための分かりやすい手がかりを与える
7. Themed Zones — これらのカードは、日常の行動や取り組み方について考えることを促す

B. 中間的成果

ボードゲームの活用を広げていく

1. 家族 — 子どもたちは、ボードゲームをプレイした後、家族とその内容について話し合うようになる。日常的にエコフレンドリーな行動へと変えていくためには、家族の理解と協力が必要である。
2. 教員 — 教員によってボードゲームを用いた授業が実施される。これにより、学校でプラスチックごみに関連する新たな授業やプロジェクトへとつながる可能性がある。

3. 協力者 — 地域でボードゲーム体験イベントを実施する（NGO のメンバー、地域団体のメンバー、高校生、大学生など）。

C. 長期的成果

さまざまな分野における変化

プラスチックごみや教育に関わる新たな法律、規則、制度など。

IX 評価方法

評価は、ゲームプレイのセッション（授業またはイベント）に参加する子どもたちを対象とした質問票によって行う。子どもたちは、セッションの前に、プラスチックごみに関するいくつかの質問およびクイズに回答する。また、セッション後には、同じクイズに加え、再びプレイしたいかどうか、そして

ボードゲームまたはイベントに対する感想についてのアンケートも実施する。クイズの設問例としては、「3Rとは何か」「プラスチックの大半は何から作られていますか」「2050年にはプラスチックの量が魚の量を上回ると予測されています。これは正しいですか」といったものがあり、解答はボードゲームの解答集に含まれている。セッション前の質問票を実施することは、子どもたちの期待や事前知識を把握するうえで有用である。また、セッション後の質問票によって、理解度、参加度、楽しさを把握する。さらに、協力者（教員、団体スタッフ、学生ボランティア）に対しても、ボードゲームおよびイベントを評価してもらうための質問票を用意する。その目的は、多様な視点からフィードバックを得ることである。内容は、ゲーム自体に関することとイベントに関することである。これにより、子どもたちの行動についてのフィードバックも得られる。重要な点は、このボードゲームが子どもたちにとって有効であるかどうかである。（図6&7）

図6

対象層	評価時期	評価方法	主要指標／設問	評価目的
子どもたち	セッション前	アンケート およびクイズ	プラスチックごみに関する事前知識（例：「3Rとは何か」「プラスチックの大部分は何から作られているか」「2050年におけるプラスチックと魚の比率」など）および期待	子どもたちの期待を把握するとともに、事前知識の基準値を確認する
子どもたち	セッション後	アンケート およびクイズ	クイズの定量的な結果（事前セッションと同一内容）、再度プレイしたい意向、ボードゲームまたはイベントに対する質的な感想、参加度、楽しさ	知識の定着度、参加度、楽しさを測定し、ゲームの有効性を判断する
協力者（教員、団体スタッフ、学生ボランティア）	セッション後	アンケート	ゲームおよびイベントに関する質的フィードバック、子どもたちの行動観察、ゲームの有効性に関する認識	ボードゲームおよびイベントの実施状況を評価するため、多角的な視点からフィードバックを収集する

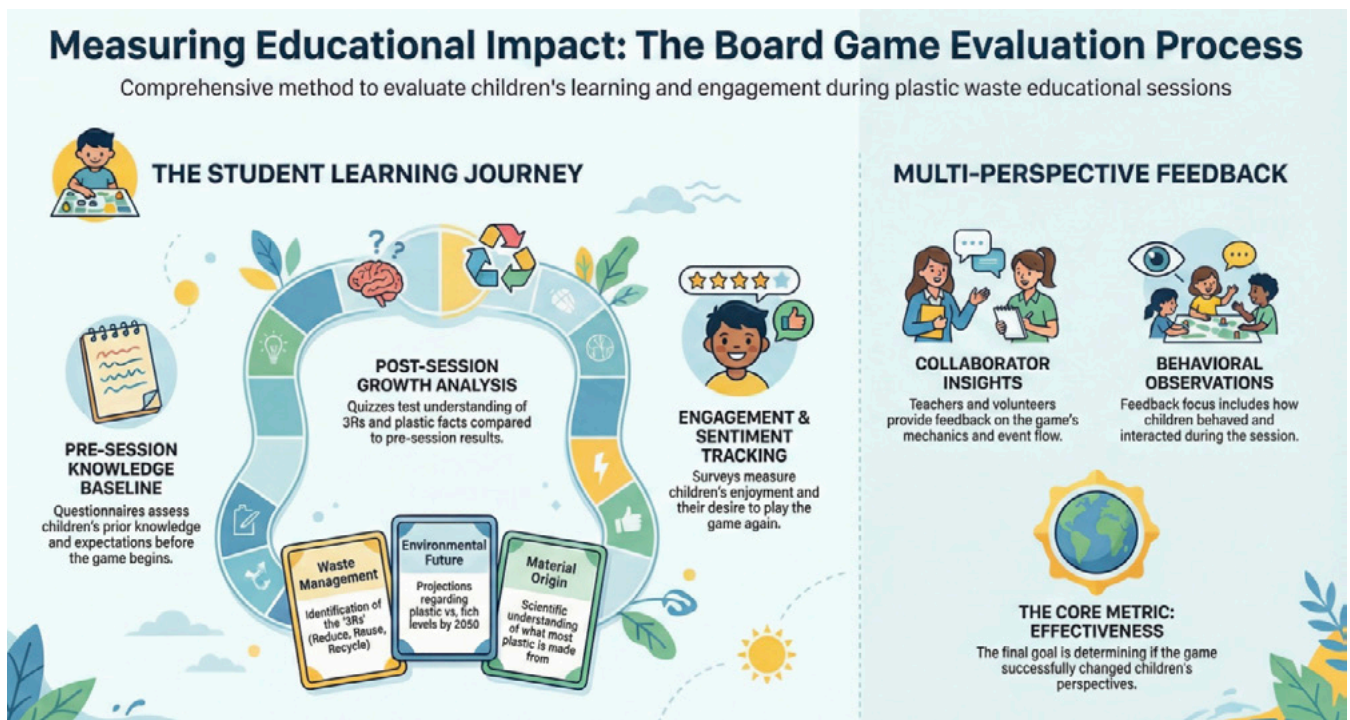


図7

X 結論

結論として、Manibuのエコクエストは、複雑な持続可能性の課題を、魅力的で身近に感じられる体験へと変えることによって、遊びを通じた学習が子どもたちの間に意義ある環境意識をいかに育み得るかを示している。当該プロジェクトは、フィリピンで得た学びを通じて、地域の課題と実績ある廃棄物管理の文化とを結びつけ、それによって、早期教育、チームワーク、責任感の重要性を、ボードゲームという手法を通じていっそう強調している。インタラクティブなゲームプレイを通じて、子どもたちは、日々の選択が重要であること、そして集団的な行動が現実の変化につながり得ることを学ぶ。こうした若いプレイヤーが将来の意思決定者へと成長していく中で、エコクエストを通じて育まれた習慣や価値観は、2050年までに、より平和でサステナブルな世界に寄与していく。エコクエストは、教育者にとって楽しく学びを教えるためのボードゲームを提供するだけでなく、知識と子どもたちの学びとを結びつける役割も果たしている。最終的に、当該プロジェクトは、持続可能性は恐れや義務感によって実現されるのではなく、理解、協力、共有された責任を通じて達成されるものであることを私たちに思い起こさせる。継続的な取り組みがあれば、Manibuのエコクエストのような教育主導の取り組みは、人と地球とのより均衡の取れた関係が実現可能であるという希望を示している。

参考文献など

- Bautista, R. (2015年). Promoting Digital Empowerment through Implementation of Barangay Management System. (バランガイ管理システムの導入を通じたデジタル・エンパワーメントの推進). https://www.academia.edu/82823341/Promoting_Digital_Empowerment_through_Implementation_of_Barangay_Management_System
- Cottom, J., Cook, E., & Velis, C. (2024年). A local-to-global emissions inventory of macroplastic pollution. (マクロプラスチック汚染の地域レベルから地球規模に至る排出インベントリ). *Nature*, 633, 101 - 108. <https://doi.org/10.1038/s41586-024-07758-6>
- Lamanauskas, V. (2023年). THE IMPORTANCE OF ENVIRONMENTAL EDUCATION AT AN EARLY AGE. (幼少期における環境教育の重要性). *Journal of Baltic Science Education*. <https://doi.org/10.33225/jbse/23.22.564>
- Liefänder, A., & Bogner, F. (2014年). The Effects of Children's Age and Sex on Acquiring Pro-Environmental Attitudes Through Environmental Education. (環境教育を通じた環境配慮意識の獲得における子どもの年齢および性別の影響). *The Journal of Environmental Education*, 45, 105 - 117. <https://doi.org/10.1080/00958964.2013.875511>

[GREEN HASHIRAS]

EcoLeads：ユース・アクション・インパクト

「私たちはEcoLeads。団結して立ち上がり、
ASEANの空の下、目的と誇りを胸に進んでいく。
プラスチックごみから、私たちが追い求める未来へ。
私たちの希望こそが、この場所を再建する力。」

EcoLeadsは、日ASEANユース・フォーラムのもとで形成された
若者の協働体制であるGreen Hashirasを基盤としている。

Member

Sovannvita Torng
木村 魁

Padaphone Atvaly
Eaindray Phoo Myat

Siriphong Chotirat
Thu Hang Tran

I はじめに

A. 2050年に向けたビジョン

2050年までに、ASEAN各地の若者が、資金や支援への明確なアクセスを得ながら、地域に根ざしたプラスチックごみ対策を主導している。環境への懸念は、若いリーダー、メンター、そして測定可能な成果から成る自律的なネットワークを通じて、持続的な行動へと変わっていく。

EcoLeadsは、試行段階を超えて反復・応用可能なモデルを構築することで、このビジョンに貢献する。定期的なワークショップの実施、伴走型のプロジェクト形成、利用しやすい資金支援、そしてプラスチック削減量の明確な測定を通じて、このプログラムは、若者の問題意識を着実に長期的な環境行動へとつなげていく。ASEAN各地でより多くのコホートが育つにつれ、プラスチックごみ削減に向けたそれぞれの地域の取り組みが積み重なり、地域全体を2050年の目標へと徐々に近づけていく。

B. 研究の背景

ASEANおよび日本全体において、プラスチック汚染は日常

生活における大きな問題となっている。プラスチックは河川を流れ、海岸線に蓄積し、かつて地域社会を支えていた生態系の中に沈着していく。この危機は、使い捨てプラスチックの消費増加だけでなく、プラスチックの環境流出を許してしまう不均衡な廃棄物管理システムによっても引き起こされている（World Bank, 2022）。プラスチックは共有された水路や海を通じて移動するため、ある場所で捨てられたものが、別の場所ではしばしば負担となる。その結果、プラスチック汚染は地域全体に深く関わる課題となっている（Jambeck et al., 2015; World Economic Forum, 2023）。

環境への懸念が現実の成果へとどのように結びつくのかをよりよく理解するため、EcoLeadsチームは、日ASEANユース・フォーラムのもとで得たフィリピンおよび日本での現地経験を振り返った。いずれの地域でもプラスチック汚染に対する高い意識は見られたが、その結果は、それを支える仕組みの有無によって大きく異なっていた（表1）。

これらの観察から、明確な示唆が得られた。すなわち、どちらの文脈においても問題への関心や思いは存在するものの、持続的なインパクトは仕組みに左右されるということである。仕組みが脆弱であれば、どれほど強いコミットメントがあっても、長期的な変化を生み出すことは難しい。

表1. 二つの旅路、一つの示唆：フィリピンと日本からの学び

現地での経験	フィリピン	日本
私たちが目撃したこと	日常生活の中や水路に見られるプラスチック	体系的な仕組みによって管理されるプラスチック
地域の対応	強い危機意識と協力の意思	責任意識が日常の行動に組み込まれている
若者の関与	清掃活動に積極的に参加するボランティア；（例） ・DENR（フィリピン環境天然資源省）Collection Contest ・Project Pick	イノベーションや解決策に取り組む若者たち；（例） ・株式会社カマン ・グリーンバード（非営利団体） ・上勝町ゼロ・ウェストセンター（徳島県勝浦郡上勝町）
行動への動機づけ	限定的で、制度化されていない	明確で、制度として整備されている
テクノロジーの活用	デジタル面での支援は限定的である	イノベーションとテクノロジーが統合されている
ここから得られた学び	取り組みへの意欲はみられる	継続を支える仕組みが整っている

C. 問題提起

若者の積極的な参画が見られるにもかかわらず、若者を対象とした環境分野の取り組みの多くは、依然として脆弱で短期的なものにとどまっている。若者は協力を求められることはあっても、主体的に主導する立場を与えられることはほとんどない。彼らの関与は、無償かつ一時的であることが多く、資金、意思決定、実施体制とも切り離されている。その結果、有望なアイデアの多くが計画段階を超えて進まない。

このギャップは意欲の問題ではなく、構造的な問題である。言い換えれば、若者は環境問題に強い関心を持ち、行動する意志もあるが、その取り組みを短期的な活動に終わらせず継続していくために必要な資源、資金調達、プロジェクト管理能力、意思決定権へのアクセスを欠いている（UNDP, n.d.）。実際、研究によれば、若者主導の気候・環境イニシアティブは、一貫して資金面の障壁と制度的支援体制へのアクセスの制約に直面していることが示されている（Gan, 2025）。アイデアから実施に至るまでの体系的な道筋がなければ、関与は継続的なものではなく、散発的なものにとどまる。

同時に、ASEAN 全体におけるプラスチックごみの発生量は増加し続けており、先進的な制度や仕組みを有する国でさえ、消費行動のあり方により依然として大量のごみを生み出している（Vuk et al., 2025）。若者には問題意識を持つことが期待されている一方で、広く展開可能な解決策を実行に移すための体系的な手段が与えられることはほとんどない。

D. 目的

EcoLeads は、この現実に対応するため、若者を短期的なボランティアではなく、プラスチックごみ対策を長期的に実行する担い手として位置づけ直す。このイニシアティブは、若者にさらなる関心を求めるのではなく、より効果的に行動できるよう支援することを目指している（表2）。

表2. 目的と重要業績評価指標（KPIs）

目的1：若者の能力を測定可能な形で強化する	
期待される成果	若者が技術力、リーダーシップ、プロジェクト管理能力の向上を示す
主要指標（KPI）	▶ ワークショップ修了率80%以上 ▶ 参加グループごとに、実現可能なプロジェクト提案を少なくとも1件提出 ▶ リーダーシップおよびプロジェクト計画に関する自己評価スコアが、プログラム前後で改善していること
目的2：資金獲得と実施が可能な取り組みを実現する	
期待される成果	若者主導のプロジェクトが、構想段階から、体系的な資金調達と実施の段階へ移行する
主要指標（KPI）	▶ 資金源とのマッチングが成立した提案数 ▶ シード資金または代替的資金調達（CSR-企業の社会的責任、クラウドファンディング、大学資金）を獲得したプロジェクト数 ▶ 実施段階に入ったプロジェクト数
目的3：地域レベルで、検証可能なプラスチックごみの削減を達成する	
期待される成果	地域レベルで、プラスチックごみの削減が測定可能な形で実現される
主要指標（KPIs）	▶ プロジェクト・サイクルごとに削減または再活用されたプラスチックごみ量（kg） ▶ 実施されたプラスチックごみ管理施策の件数 ▶ 参加者の間での持続可能な廃棄物管理実践の導入状況

II アクションプラン

A. EcoLeads モデル：学びからインパクトへ

EcoLeads は、次の明確な5つのステップで進められる：

1. 若者に対し、プラスチックごみ問題とプロジェクト計画に関する研修を行う。
2. 小規模で実現可能なプロジェクトを設計できるよう支援する。
3. 資金源または代替的支援の特定を支援する。
4. 実施期間中の伴走支援を行う。
5. 削減されたプラスチックごみ量を測定する。

目標は明快である。若者を「学ぶ段階」から「実行する段階」へと移行させることだ。参加者は、意識啓発キャンペーンで終わるのではなく、定められた期間内に、実際のプロジェクトを設計し、資金を確保し、実施し、その成果を測定しなければならない。

B. ワークショップの構成と継続実施戦略

本ワークショップは、国境を越えた参加のしやすさ、コスト管理、拡張性を重視した、継続的なオンライン型プログラムモデルを通じて実施する。また、受け身の参加を避けるため、オンライン・ワークショップには以下を組み込む：

- ▶ 少人数のブレイクアウト・グループ（1グループ当たり5～6名）
- ▶ 各自のプロジェクト案に結びついた毎週の課題
- ▶ 必須のマイルストーン提出（コンセプトノート → 提案書ドラフト → 最終提案書）
- ▶ 2週間ごとのメンター面談
- ▶ 全課程への参加を完了した場合に限るシード資金への応募資格

課題を完了しない参加者は、資金調達段階には進むことができない。

そのため、ベトナムは、準備状況と実現可能性のバランスが最も優れていることから、試行段階の実施国として選定されている。Green Hashiras ネットワークは複数の ASEAN 諸国にまたがっているが、現時点のベトナムには、活発な大学の環境団体が存在すること、参加者募集が比較的容易であること、さらに調整やモニタリングを支える現地在住のチームメンバーがいることなど、実務上の利点がある。まず 1 か国から開始することで、他の ASEAN 諸国へ拡大する前に、EcoLeads モデル全体を管理可能な環境で検証することができる。

中核的な構成に加え、各ワークショップ・サイクルには、プラスチックごみ問題と関連する法的枠組みの双方を扱う意識啓発セッションを組み込み、参加者が環境課題とガバナンスについて総合的に理解できるようにする。また、テーマ・ローテーション方式を採用し、各回のワークショップでは、プラスチックごみに関する異なるテーマまたは技能分野に焦点を当てる。毎月ワークショップを実施できない場合でも、このローテーション型テーマモデルとデジタル形式により、プログラムの継続性、時宜性、持続可能性を長期的に確保することができる。

C. 体系化されたワークショップテーマ：「PlastiCamp」

EcoLeads のオンライン型ワークショップ・シリーズ「PlastiCamp」は、若者を環境意識から実践的な行動、さらにリーダーシップへと導くことを目的とした、体系的かつ継続的なテーマ群に基づいて構成されている（表3）。

表3. PlastiCamp ワークショップのテーマ

テーマ	重点事項	関連する SDGs
テーマ 1	・プラスチックごみに関する意識向上 ・サステナブルな暮らし	SDG12：つくる責任、つかう責任 SDG13：気候変動に具体的な対策を SDG14：海の豊かさを守ろう
テーマ 2	・地域における行動 ・創造的なアドボカシー	SDG11：住み続けられるまちづくりを SDG4：質の高い教育をみんなに SDG17：パートナーシップで目標を達成しよう
テーマ 3	・プロジェクトの実施 ・振り返り ・若者のリーダーシップ	リーダーシップとサステナビリティ

1. テーマ 1：プラスチックごみへの意識向上と持続可能な暮らし

・フェーズ 1

このワークショップテーマでは、ごみの削減、再使用の実践、リサイクルの仕組み、使い捨てプラスチックに代わる持続可能な選択肢といった、日常に根ざした実践的行動を重視す

る。参加者は、双方向型の議論や活動を通じて、持続可能な生活習慣を身につけるとともに、個々の選択が環境全体にどのような影響を及ぼし得るかを学ぶ。

2. テーマ 2：地域における行動と創造的なアドボカシー

・フェーズ 1 & 2

若者たちは、ベトナムにおいてプラスチックごみ問題に取り組む小規模な地域プロジェクトや、創造的なアドボカシー・キャンペーンを企画できるよう支援を受ける。

3. テーマ 3：プロジェクトの実施、振り返り、そして若者のリーダーシップ

・フェーズ 3

最終テーマでは、若者自身が設計したプロジェクトの実施と、その成果および得られた教訓の振り返りに焦点を当てる。またこのテーマでは、リーダーシップ育成も導入し、積極的な参加者が今後のワークショップ・サイクルにおいてメンター役を担い、EcoLeads プログラムの持続可能性に貢献することを促す。

D. ガイド付きのプロジェクト策定、予算立案、提案書作成

「PlastiCamp」のテーマ 3 の一環として、本プログラムでは、予算立案と資源計画について実践的な指導を行い、参加者が費用を見積もり、必要な資材を特定し、実現可能性と持続可能性の観点から活動の優先順位を定められるよう支援する。さらに参加者は、目的、活動内容、スケジュール、インパクト、持続可能性に焦点を当てた提案書作成の支援も受ける。プログラム終了時まで、各参加者または各グループは、地域で実施可能であり、将来の取り組みに向けてさらに発展させることもできる、簡潔で実行可能なプロジェクト提案書を作成する。

E. AI 支援による提案書と資金提供者のマッチング、およびメンター割当て

EcoLeads プラットフォームでは、AI 支援型マッチングシステムを用いて、若者主導の提案と適切な資金源を結びつける。参加者はプロジェクト提案書を一度アップロードするだけで、AI がその内容を提携先の助成機会データベースと照合・分析する。このデータベースには、米国国際開発庁（USAID）、ユニセフ（UNICEF）、国連開発計画（UNDP）、国際交流基金、青年東南アジア・リーダー・イニシアチブ（YSEALI）、グローバル・グリーングラント・ファンドのような機関によるプログラムに加え、アセアン大学ネットワークを通じて得られる機会も含まれている。この分析に基づき、システムは各提案に最も適した資金提供者を順位づけして提示する。このプラットフォームが特に有用なのは、AI が単に資金提供者を一覧化するだけでなく、各資金提供者の要件に合わせて提案書を再構成し、利用者に対して追加で必要な情報を具体的に示してくれる

点にある。これにより、異なる助成金申請ごとに提案書を書き直す負担が軽減される。このプロセス全体を通じて、EcoLeads チームは参加者に助言を行い、提案内容のブラッシュアップや申請手続の進行を支援する。

透明性とアクセスのしやすさを確保するため、執筆者らが開発した EcoLeads の AI 支援型提案書プラットフォームは、プロジェクトのウェブサイトから利用できる。 <https://ecolead-saqy.vercel.app/>

F. 体系化されたパイプライン：学習 → 設計 → 資金調達 → 実施 → 測定

EcoLeads モデル（表4）は、参加者を初期学習から検証可能なインパクトへと導く、連続的なパイプラインに基づいている。学習フェーズでは、参加者はワークショップに参加し、プラスチックごみの課題と解決策の設計に関する理解を深める。設計フェーズでは、明確な目的、予算、スケジュールを備えたプロジェクト構想を練り上げる。資金調達フェーズでは、AI マッチングシステムを通じて、提案書を適切な資金提供者につなげる。資金が確保されると、参加者は実施フェーズへ進み、EcoLeads チームによる継続的な支援を受けながら、地域レベルでプロジェクトを実施する。最後に、測定フェーズでは、プロジェクトの成果を追跡・検証し、プラスチックごみの削減量をキログラム単位で記録する。

表4. EcoLeads モデル

ステージ	内容
学習	環境教育と意識向上
設計	プロジェクトの策定と計画立案
資金調達	AI 支援による提案書マッチング
実施	地域レベルの行動
測定	検証可能なプラスチックごみ削減

Ⅲ 段階的な実施スケジュール

A. フェーズ 1：能力強化とプロジェクト設計 (2026年3月1日～2026年3月30日)

このフェーズでは、若者のスキルを強化し、アイデアを実現可能なプロジェクトへと具体化することに重点を置く。

- ▶ プラスチックごみ対策、プロジェクト管理、予算立案、インパクト測定に関する研修ワークショップの実施
- ▶ EcoLeads の AI 支援型提案書プラットフォームの紹介
- ▶ メンターの支援を受けながら行う、プロジェクト構想および提案書ドラフトの作成

B. フェーズ 2：提案書のマッチングと資金調達 (2026年4月5日～2026年4月25日)

このフェーズでは、若者が設計した解決策を適切な資金源に

つなげる。

- ▶ メンターの支援を受けた提案書の精緻化と最終化
- ▶ EcoLeads プラットフォームを用いた、提案書と適合する資金提供者とのマッチング
- ▶ 透明性のある審査・選定プロセス
- ▶ 選定された若者主導プロジェクトへのシード助成金の支給

C. フェーズ 3：プロジェクトの実施と評価 (2026年5月1日～2026年7月1日)

このフェーズでは、現場での実践と学びを支援する。

- ▶ 資金提供を受けたプロジェクトの地域レベルでの実施
- ▶ 継続的なメンタリングと技術支援
- ▶ 産出、成果、課題のモニタリング
- ▶ 環境へのインパクト、若者の能力向上、拡張可能性を評価するための最終評価

Ⅳ 実施設計とガバナンス

A. ガバナンス体制と役割（表5）

EcoLeads（コーディネーター）：プログラム設計、デジタル基盤、ワークショップ実施、インパクトの記録を統括する。

若者参加者（実施者）：プロジェクトの設計、アドボカシー・キャンペーンの立ち上げ、ピアツーピアサポートを担う、本イニシアティブの中核的な推進役として活動する（図1）。

図1. 若者参加基準（ポスター版）

メンター（アドバイザー）：プロジェクトの実現可能性を確保す

表5. プロジェクトの各段階とガバナンス上の役割

役割	フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3
EcoLeads	ワークショップを実施する	資金提供者とのマッチングを管理する	MRV と最終化を統括する
若者参加者	技術的スキルを学び、プロジェクト構想を立案する	最終プロジェクト提案を精緻化し、提案発表を行う	地域プロジェクトを実施し、ピアメンタリングを行う
メンター	フィードバックを行う	最終提案を審査する	継続的な技術的実施支援を行う
資金提供者・パートナー	戦略的助言を行う	プロジェクトを選定する	インパクト・データを確認する

るため、技術的助言とフィードバックを提供する環境分野の専門家およびリーダー。

資金提供者・パートナー(イネーブラー)：事業の拡大と長期的な持続可能性に必要な資金、戦略的方向性、発信力を提供する。

B. 試行段階の実施

EcoLeads の試行段階は、概念実証として、まずベトナムに焦点を当てて実施される。ベトナムをパイロット対象とする方針は、GreenHub による学生主体の「見直す、減らす、リサイクルする (Rethink, Reduce, Recycle)」イニシアティブのような成功した地域モデルとも整合している。これらの取り組みは、プラスチックのモニタリングを学齢期の若者向けプログラムに組み込むことの有効性を示している (GreenHub, 2024)。

C. モニタリング・報告・検証 (MRV)

PlastiCamp の MRV アプローチは、東南アジアにおける循環型介入のために示されたデータの完全性と透明性の原則を採用し、若者が収集したデータが一貫性を備え、利用しやすく、地方の政策立案者にとって実行可能なものとなるようにしている (UNDP, 2025)。

V アウトリーチ、パートナーシップ、エコシステム形成

A. デジタル・アウトリーチと若者募集戦略

EcoLeads は、Instagram、TikTok、LinkedIn、および公式 EcoLeads ウェブサイト上で積極的な発信を維持する。これらのプラットフォームは、教育コンテンツの共有、ワークショップ日程の告知、資金提供を受けたプロジェクトの成功事例の紹介に活用される。初期の対象層は、環境活動に関心がありながら資金調達の道筋にアクセスできていない ASEAN 全域の大学生とし、プログラムの成熟に応じて、他の若年層へも拡大していく可能性がある。

B. 大学、市民社会組織、資金提供機関との連携

EcoLeads は、参加者募集とワークショップの周知を目的として、大学、市民社会組織、環境 NGO と連携する。ベトナムでの試行段階では、本プロジェクトは現地大学と連携し、初期

的なパートナーシップを構築する。プロジェクトの拡大に伴い、同様の連携を他の ASEAN 諸国でも構築していく。また、プラットフォーム上で利用可能な助成金データベースを拡充するため、資金提供機関との連携も進めていく。

C. 地域の関係者とのコミュニティ基盤型エンゲージメント

地域リーダーや廃棄物管理の実務者を含む地域の関係者が、プロジェクトの実施に関与する。これにより、若者主導の解決策がそれぞれの地域の文脈に即したものとなり、実際のニーズに対応できるようになる。また、コミュニティとの関与は、プロジェクトに対する地域の当事者意識を高め、初期の資金提供期間を超えて持続的なインパクトが生まれる可能性を高める。

D. 国境を越えた協働と ASEAN・日本間の知識交流

本プロジェクトは、まず、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナム、日本のメンバーから成る Green Hashiras ネットワークを活用する。その後、このネットワークは、TASC の同窓コミュニティおよび、より広範な ASEAN・日本間の知識交流チャンネルを通じて拡大していく。

VI 予算枠組みと資源動員

A. 実施フェーズに対応した予算構成

EcoLeads の年間予算見積額は約7,000米ドルである。この金額は、ベトナムにおける試行段階の中核的な運営費をカバーするものであり、今後、必要に応じて調整される予定である (表6)。

B. 資金源および助成金マッチング戦略

EcoLeads は、プロジェクト活動を支えるため、複数の資金源からの資金確保を目指す。資金提供候補には、米国国際開発庁 (USAID)、ユニセフ (UNICEF)、国連開発計画 (UNDP)、国際交流基金、青年東南アジア・リーダー・イニシアチブ (YSEALI) Seeds for the Future、グローバル・グリーングラント・ファンド (Global Greengrants Fund) が含まれる。これらの組織は、若者のエンパワーメント、環境の持続可能性、ならびに ASEAN と日本における地域協力で高い関心を示している。助成金に加え、EcoLeads は、クラウドファンディング・

表6. 予算概要

項目	想定費用（米ドル）
プラットフォーム開発・保守	2,000
ワークショップ実施（教材・運営）	2,500
デジタル・アウトリーチおよび広報	1,000
モニタリング・評価	500
管理費・雑費	1,000
合計	7,000

キャンペーン、企業スポンサーシップ、ならびにパートナー機関向けの有償ワークショップ実施といった自主収益の機会についても検討する。プラットフォームの成長に伴い、EcoLeads はこれらの資金提供者との正式な連携を構築するとともに、収入源を多様化し、単一の資金源への依存を低減することを目指す。

C. 財務の透明性とコスト効率に関する原則

すべての資金は EcoLeads チームが直接管理し、独立した会計担当者の監督の下、明確な文書化と定期的な報告によって、すべての関係者に対する透明性と説明責任を確保する。予算配分においては、能力強化と、測定可能なプラスチックごみ削減に直接貢献する活動を優先する。プロジェクトが他国へ拡大するに伴い、増加する運営上の必要性に対応できるよう、予算枠組みを見直し、それに応じて拡大していく。

D. 収益モデルと財政的持続可能性

プロジェクトが助成金のみに依存しないようにするため、EcoLeads は、プレミアム AI プラットフォーム機能への段階別アクセスを導入するとともに、大学や組織向けに有償の能力強化ワークショップを提供し、自主収益源とする。

VII 期待される成果

EcoLeads プログラムは、若者主導の環境イニシアティブが、体系的かつ支援を受けながら、構想段階から実施段階へと進むことを可能にする、具体的な成果一式を生み出すことが期待されている。

A. 中核的成果

1. 成果 1：資金提供者と学生主導の提案をつなぐマッチング機構

体系化されたマッチングプラットフォームと審査プロセスにより、学生が適切な資金調達経路を特定できるよう支援し、若者の助成金申請への参加を妨げがちな事務的障壁を軽減する。

2. 成果 2：プロジェクト実施に向けた資源提供

参加者は、自らのプロジェクトを実施するうえで不可欠な、

以下のような連携的支援を受ける：

- ▶ ワークショップおよびメンタリングを通じた専門的知見
- ▶ シード資金および助成金獲得支援を通じた資金面での支援
- ▶ 大学、市民社会組織、環境 NGO を含むネットワークへのアクセス

B. 若者主導の環境行動への貢献

これらの成果は総体として、若者が環境イニシアティブを効果的に実行するために必要な運営基盤を築くものであり、同時に、プロジェクト設計、資金へのアクセス、そして実現可能な実施経路の整合性を確保する。

VIII インパクト測定

A. 環境インパクト

- ▶ 削減、再活用、または発生抑制されたプラスチックごみ量（kg / 月 / プロジェクト）
- ▶ 変化が見られたプラスチックの使用・廃棄行動の件数（例：使い捨てプラスチック使用の削減、廃棄物分別の増加など）
- ▶ 実施された地域レベルのプラスチックごみ管理施策の件数

B. 若者の能力

- ▶ 能力強化ワークショップを修了した学生数
- ▶ 作成された実現可能な提案書の件数
- ▶ 以下の方法により確認される、若者の能力向上：
 - リーダーシップ、プロジェクト管理、協働に関する自己評価
 - メンターまたは仲間からのフィードバック

C. 地域レベルでのインパクト

- ▶ 関与した地域住民の人数
- ▶ アンケートおよびインタビューを通じて収集した、妥当性と有用性に関する地域からのフィードバック
- ▶ 地域に培われた能力。これには、共有・習得された技能や、プラスチック管理のために定着した日常的実践が含まれる

IX サステナビリティおよび拡張性戦略

A. サステナブルファイナンス戦略

長期的な実行可能性を確保するため、EcoLeads は、初期の助成金支援に加え、機関との連携およびサービス提供型収益を組み合わせたハイブリッド型の財務モデルを採用する。プログラムの成熟に伴い、持続可能性は次の 3 つの仕組みによって強化される：①採択された若者主導プロジェクトから、監督お

よびロジスティクス費用を賄うための、透明性のある管理費または調整費の一定割合を確保すること、②大学および提携組織の持続可能性プログラムまたは市民参加プログラムの一環として、共同出資によるワークショップ・サイクルを実施すること、③構造化されたインパクト報告と引き換えに、企業およびESG（環境・社会・ガバナンス）に整合するパートナーが支援するスポンサード・コホートを設けること。オンライン実施とボランティアベースのメンタリングにより運営コストを抑えつつ、これらの多様化された収益源は、若者参加者への無償アクセスを維持しながら、外部助成金への依存を段階的に低減するよう設計されている。

B. 循環型学習モデルと継続的なプロジェクト・サイクル

EcoLeads は、各プロジェクト・サイクルが知識、ツール、教訓を生み出し、それらが次のコホートへ直接引き継がれていく循環型学習モデルを採用している。この過程で、教材は更新・蓄積され、今後の参加者が過去の経験を土台として学べるようにする。

C. 若者から若者への知識共有

EcoLeads は、持続可能性を支える中核的な仕組みとして、若者から若者への知識共有を重視しており、過去のプロジェクト・サイクルの修了者が新たな参加者に対するメンター役を担う。修了者による経験共有やメンタリングは、ソーシャルメディア上のコミュニティ・グループを通じて行うことができる。

D. ローカライズ戦略と ASEAN 諸国への段階的拡大

EcoLeads は、各地域に適応可能な仕組みであることを目指し、段階的拡大戦略を採用している。初期実施では、モデルの有効性を検証し、運営プロセスを洗練させるため、限られた数のパイロット・プロジェクトに重点を置き、その後、現地の若者パートナーを通じて ASEAN 諸国へ段階的に拡大している。

X 結論

EcoLeads は、仕組み、支援、そして測定可能なインパクトを通じて、若者の問題意識を行動へと転換する。若いリーダーたちを、学習から資金調達、実施へと導くことで、本プロジェクトは、ASEAN と日本における地域基盤型のプラスチックごみ解決策のための、自律的に持続するエコシステムを構築する。そのことを通じて、EcoLeads は、若者のための仕組みが構築されれば、持続的な環境変化が後に続くことを示している。

参考文献など

- ベトナム・グリーン開発支援センター (GreenHub). (2024年). *Environmental education in combating marine plastic waste – the role of youth in schools*. (海洋プラスチックごみ対策における環境教育 – 学校における若者の役割). Asia-Pacific Network for Global Change Research. (アジア太平洋地球変動研究ネットワーク). <https://www.apn-gcr.org/project/environmental-education-in-combatting-marine-plastic-waste-the-role-of-youth-in-schools/>
- Gan, S. (2025年). *Youth climate funding study: Mapping the funding landscape for youth-led climate solutions*. (若者による気候ソリューションのための資金環境のマッピング：若者向け気候資金調査). Youth Climate Justice Fund. <https://ycjf.org/ycfs-2025>
- Jambeck, J. R., Geyer, R., Wilcox, C., Siegler, T. R., Perryman, M., Andrady, A., Narayan, R., & Law, K. L. (2015年). *Plastic waste inputs from land into the ocean*. (陸域から海洋へのプラスチックごみ流入). Science, 347(6223), 768-771. <https://doi.org/10.1126/science.1260352>
- 国連開発計画【UNDP】. (2025年). *Management of plastics waste and circular interventions on plastics in South, Southeast Asia, and the Pacific*. (南アジア、東南アジアおよび太平洋地域におけるプラスチックごみ管理とプラスチックに関する循環型介入). <https://www.undp.org/asia-pacific/projects/management-plastics-waste-and-circular-interventions-plastics-south-southeast-asia-and-pacific>
- 国連開発計画【UNDP】. (n.d.). *Youth and climate*. (若者と気候変動) UNDP Rome Centre (UNDP ローマ拠点). <https://www.undp.org/romecentre/focus-areas/youth-and-climate>
- Vuk, A., Szűcs, I., & Bauerné Gáthy, A. (2025年). *Waste management and plastic waste recycling in Japan, China, Singapore and South Korea*. (日本、中国、シンガポールおよび韓国における廃棄物管理とプラスチックごみのリサイクル). International Review of Applied Sciences and Engineering, 16(1), 118-131. <https://doi.org/10.1556/1848.2024.00841>
- 世界銀行. (2022). *Get CLEAN and GREEN - Solid and Plastic Waste Management in Lao PDR: Findings and Actions for Change (English)*. (Get CLEAN and GREEN – ラオス人民民主共和国における一般廃棄物およびプラスチックごみ管理：主な知見と変革に向けた行動 (英語版)). ワシントン D.C. : 世界銀行グループ. <http://documents.worldbank.org/curated/en/099100002182296296>
- 世界経済フォーラム. (2023年). *How to defeat the plastic tide threatening the ASEAN region's green growth*. (ASEAN 地域のグリーン成長を脅かすプラスチック問題にどう立ち向かうか). <https://www.weforum.org/stories/2023/10/defeat-plastic-tide-threatening-asean-green-growth/>



Blue Horizon オーガニゼーション

— プラスチックごみ問題に取り組む、世界規模の若者主導組織

Member

Sreypitch Kuy
Chintammy Pamela Artanti

鈴木 純伍
Ram Paulo Macam

Puteri Man-aree

I はじめに

文化、背景、課題など、さまざまな違いに満ちた世界において、今これまで以上に重要なのは、私たちに共通するものの中に解決策を見だし、分断の中に結束を見だし、より良い未来を目指す歩みの中に平和を見出すことである。ASEAN、日本、そして世界全体でプラスチックごみが深刻な問題となっている中、私たちは単一の解決策では対応できない多様なプラスチックごみ問題に直面している。私たちのアクションプランとしては、多様性を強みに変えて活用する組織を立ち上げ、それを、若者の参画を高め、有意義な意識啓発を広げ、地域に根ざした社会的行動を促すための手段とする。

2050年に向けたビジョン：

2050年までに、長期的な持続可能性を最優先とし、若者がプラスチックごみ問題への対策を主体的に始動する世界を私たちは思い描く。

II TASC プログラムから得られた知見と学び

A. 現状認識 — プラスチックごみ

プラスチックごみは、国連環境計画（United Nations Environment Programme [UNEP] , n.d.; UNEP, 2023; Alqattaf, 2020）でも認識されているように、世界的に見て最も深刻な問題の一つである。ASEAN 各国と日本は、カンボジアにおけるプラスチック袋の過剰使用、インドネシアにおける廃棄物管理の不備と廃棄物輸入、日本における過剰なプラスチック包装、フィリピンのサシェ経済、タイにおけるリサイクル不足など、それぞれ異なるプラスチックごみ問題に直面している（UNDP Climate Promise, 2025; UNDP Cambodia, n.d.; IUCN NL, 2025; Riliananda & Lotulung, 2025; Rogers, 2024; Borgers, 2025; Koons, 2024; Pustadan, 2024; Enviance ASIA, n.d.; Lodhi, 2025; ASEAN Secretariat, 2017）。

B. 現状認識 — 若者

国や置かれた状況が異なる若者たちも、プラスチックごみ問

題に対して一定の認識を持っている。しかし、自発性や動機づけ、利用しやすいプラットフォームの不足により、その懸念を行動に結びつけることができていない（Ningrum, 2024; United Nations Development Programme [UNDP] Montenegro, 2022）。

C. フィールドトリップ

フィリピンと日本を訪れた後、私たちはプラスチック問題そのものと、異なる社会がそれにどのように対応しているかについて、より深く学んだ。フィリピンでは、プラスチックごみの問題が非常に目に見えやすく、限られた廃棄物管理体制や日々の生活維持の必要性を物語っていた。そのことを通じて、環境問題が貧困やインフラと密接に関係していることを私たちは実感した。たとえばバセコ地区では、ごみが管理され、それが生計手段へと変えられている様子を目にした。一方、日本では、厳格な分別、リサイクルのルール、そして市民の規律によって、プラスチックがより体系的に管理されている。しかし、両国とも依然としてプラスチックに大きく依存している。総じて私たちは、解決策の効率性には違いがあるとしても、真の変化には強固な仕組みと共有された責任が必要であることを学んだ。

D. ギャップ — 若者とプラスチックごみ対策との隔たり

若者とプラスチックごみ対策との間にある大きな隔たりは、連携の不足と、若者にプラスチックごみ問題に対処するための十分な権限が与えられていないことにある。Ningrum (2024) による WWF インドネシアの記事および UNDP Montenegro の報告書（2022）によれば、若者はプラスチック使用の問題を認識していながらも、それを見過ごし、日常生活の中で使い続けている。プラスチックごみ問題の解決に意欲を持つ若者は存在するが、環境問題の解決に主体的に取り組むためには、より多くの支援、プラットフォーム、そして機会が必要である（The Annie E. Casey Foundation, 2024）。

Ⅲ アクションプラン

A. 組織概要

1. Blue Horizon オーガニゼーションについて

Blue Horizon オーガニゼーションは、ASEAN と日本の学生がプラスチックごみ問題について学び、関わるができる組織である。本組織では、メンバーがプラスチック問題を体験的に学ぶ機会を得ることで、それが社会にもたらす脅威への理解をより深められるようにする。この目標を達成するため、本組織は、プラスチックごみ問題への対応を後押しする多様なイベント、キャンペーン、取り組みを実施するプラットフォームとなる。



図1. Blue Horizon オーガニゼーション ロゴ

2. 組織モデル — アイセックと ASEAN Youth Organization (AYO)

2つの若者組織が、本組織のモデルとなっている。学生主導の大規模組織の一つであるアイセックは、特に SDGs に関連するボランティアやインターンシップの機会を学生に提供している。同組織は学生によって運営されている一方で、企業や大学とも強固に連携している (AIESEC, n.d.)。ASEAN Youth Organization (AYO) もこれに類似しているが、より短期的なイベントや、社会政治的課題に取り組むプロジェクトを実施している。また、ASEAN の若者同士のつながりを大切にし、国際的な視野を育み、より強固なネットワークを築いている (ASEAN Youth Organization, n.d.)。

3. 独自性と強み

Blue Horizon の独自性は、グローバルに活動しながら、ローカルな課題を解決できる点にある。グローバル組織として、各ユニットには、それぞれの地域で直面する多様なプラスチック問題に対する解決策を生み出せる実働の仕組みが与えられる。各支部はそれぞれ固有の実情に即して形づくられ、プラスチックごみ問題への対応に資する地域密着型の解決策を生み出す。各支部はまた、プラスチックごみ対策に焦点を当てつつ、それ

ぞれの文化にも即したイベントを企画・実施する。例えば、日本では再生プラスチック包装を用いた折り紙づくり、フィリピンでは再生海洋プラスチックを用いたパロル（フィリピンの伝統的なクリスマスランタン）制作ワークショップといったイベントが考えられる。さらに、各支部間でプロジェクト、イベント、情報の共有を促進し、自国の枠を超えてプラスチックごみ問題への理解を深められるようにする。

4. サステナビリティと拡大

多くの大学に支部を設置することで、それぞれが各大学内で半独立的な組織として運営されるため、単に一つの大規模組織として活動するよりも、はるかに管理しやすくなる。これにより、学生にとっての参加しやすが高まり、プラスチックごみ対策への関心の向上にもつながる。

B. ガバナンスと運営

日本、タイ、フィリピン、インドネシア、カンボジアの5人の創設メンバーが、Blue Horizon の運営評議会を構成する。この評議会には、組織の地理的基盤と、国際協力を通じてプラスチックごみに取り組むという共通の献身が反映されている。運営評議会は、規則の承認、透明性の確保、戦略的方向づけに加え、2050年までにプラスチックに責任を持って向き合う世界を実現するという Blue Horizon の長期目標を守る役割を担う。意思決定は合意形成と協議に基づいて行われ、5か国それぞれの公平な代表性が確保される。

プログラム担当、運営担当、財務・総務担当、広報・メディア担当、パートナーシップ・アウトリーチ担当から成る執行チームが、日常業務を統括する。このチームは、イベントを監督し、プログラムを企画し、パートナーシップと広報を管理し、支部やメンバーが地域密着型の取り組みを実施するのを支援する。

説明責任とインパクトを確保するため、Blue Horizon オーガニゼーションは、年次計画、透明な財務管理、明確な役割分担、内部コミュニケーション、モニタリングおよび評価手続などの体系的手法を用いる。中央組織および各支部を導くため、専用の運営マニュアルと組織規約を策定する。

C. 資金調達および財務モデル

Blue Horizon オーガニゼーション は、中央運営と大学ベースの各支部の双方を支えるため、多様で持続可能な資金モデルを採用する。資金は、大学、環境 NGO、環境活動家、社会的責任を重視する民間組織との連携、若者の行動、環境の持続可能性、国際開発に関連する助成金、各国支部が徴収する控えめで文脈に配慮した会費、さらにワークショップ、展示、意識啓発キャンペーンなどのプロジェクトベースの資金調達活動を組み合わせることで確保する。特定の取り組みを支援し、より幅広

い層の関与を促すため、デジタル資金調達やソーシャルメディア・キャンペーンも活用する。この多角的な資金調達アプローチは、助成金、連携、寄付、会費、事業活動を組み合わせることの重要性を重視する、一般的な NGO の資金調達実務とも合致しており、単一の資金源への依存によるリスクを減らしつつ、財政的安定性とレジリエンスを確保することを目指している。

D. 戦略とプログラムフレームワーク

1. Blue Horizon フレームワーク

Blue Horizon オーガニゼーションは、自らが実施するすべてのプロジェクト、イベント、取り組みにおいて、Blue Horizon フレームワーク を戦略的に活用する。このフレームワークは、組織がプラスチックごみ対策において有意義なインパクトを体系的に生み出すための指針となる。このフレームワークは、以下の6つの明確な構成要素から成る：

- 問題の特定と分解** — まず、私たちが解決したいプラスチックごみ問題を特定し、その問題について批判的に考える。
- 貢献可能なポイントの特定** — 問題のどの部分に若者が関わり、貢献できるのかを明らかにする。
- 目標の設定** — 続いて、このプロジェクトで何を達成したいのかを定める。
- プロジェクトの設計** — 特定されたギャップを若者の行動によって埋めるように、プロジェクトを設計する。
- 実施** — 大学を基盤とし、若者が主導する各支部を通じてプロジェクトを実施する。
- 評価** — プラスチックごみ問題への対応における若者の行動の広がり、目標がどのように達成されたかを測定することで、プロジェクトを評価する。

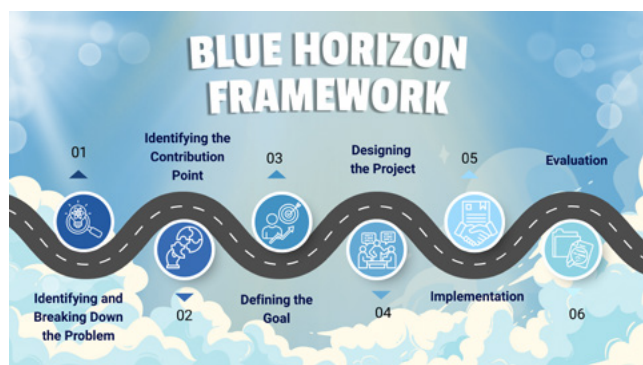


図2. Blue Horizon フレームワーク

2. Blue Horizon の柱・Sun、Moon、Stars

Blue Horizon オーガニゼーションは、3つの柱の下で運営される。Sun は、教育的で示唆に富む活動を通じて若者をエンパワーし、Moon は、ソーシャルメディアを活用して有益な情報を発信し、若者同士をつなぎ、Stars は、長期的な持続可能性を育むための連携と機会を築く。

Sun は、本組織の活動部門である。私たちは、プラスチックごみ問題の解決に意欲を持つ若者を後押しし、そのための機会

を提供することを目指す。活動内容には、廃棄物管理に関する教育プログラム、アップサイクルの促進に関するワークショップなどが含まれる。若者は、ボランティア活動やコンペティション型キャンペーンにも参加でき、そうした活動は、若者が環境問題に主体的に関わることを促すだけでなく、ASEAN と日本をまたぐグローバルなつながりを築くことにもつながる。

Moon は、本組織のソーシャルメディア情報発信部門である。ソーシャルメディアは、広く利用され、アクセスしやすいため、若者とつながるための効果的なプラットフォームである。私たちは、ソーシャルメディアを活用して、プラスチックごみに関する社会的認識を高め、本組織の目的を広く伝え、組織概要やイベント情報を紹介する。意義があり、十分に調査された内容を発信することで、ASEAN と日本におけるプラスチックごみ問題への具体的な理解を深め、若者の本プロジェクトへの参加を促したいと考えている。

Stars は、本組織の連携・機会創出部門である。若者主導の組織として、私たちは、非政府組織、若者ネットワーク、地域コミュニティと連携することで、環境分野での協働を強化することを目指す。例えば、トラッシュ・ヒーロー・ワールドは、人々がクラブに参加し、共にキャンペーンを展開するよう促すことによって、プラスチックごみ問題の解決に取り組む NGO である (Seema, 2026)。同団体は、世界各地にパートナーも有している。さらに、同団体は本組織の活動とも結びつく教育活動を提供しているため、この組織と連携することは、Blue Horizon の活動を促進し、その目標達成にも資する。この部門は、プラスチックごみ問題への対応における持続可能性に焦点を当てると同時に、協働プロジェクト、メンタリング、各種取り組みを通じて、若者が環境リーダーシップや社会的スキルを育み、多文化的なネットワークを築く機会を創出する。これらは長期的な持続可能性を支えるうえで不可欠である。

E. 組織立ち上げ案とスケジュール

1. フェーズ1 — 準備と基盤構築

目的：組織の成功裏の立ち上げに必要な基盤を整備すること

実施期間：2026年1月から6月

内容とタスク：立ち上げを成功させるため、フェーズ1は創設メンバーが主導する、組織の準備・基盤構築フェーズとする。このフェーズには3つの主要目標がある：1. 組織の規約および運営マニュアルを作成し、最終化すること。2. ASEAN と日本における各国支部の創設ディレクターおよびメンバーを選定すること。3. 組織全体および各国支部の組織体制と内部運営システムを構築すること。これらのタスクを遂行することで、Blue Horizon オーガニゼーションと各国支部の立ち上げに向けて、必要な体制をあらかじめ整えることができる。このフェーズの後半には、創設メンバーおよび各支部が、組織立ち上げ前の期待感と認知度を高めるためのティーザーや広報素材を作成するとともに、他団体、行政機関、メディア組織との連携も構築する。また、立ち上げに関

わるすべての取り組みやイベントの準備も進める。

2. フェーズ2 — 立ち上げ

目的：Blue Horizon オーガニゼーションと ASEAN および日本の各支部を正式に立ち上げること

実施期間：2026年7月

内容とタスク：プラスチックフリージュライに合わせて、Blue Horizon オーガニゼーションは各国支部とともに7月に立ち上げられる。組織の発足を記念して、2026年7月18日にフィリピン・マニラで公式ローンチイベントを開催する。このイベントでは、創設メンバーが組織の目的、短期および長期の目標について説明し、一般の人々や将来のメンバー候補に対して、組織の概要と運営方法を伝える。また、ゲストスピーカーを招き、環境保護や、世界各地におけるプラスチックごみ問題とその対策について講演してもらう。各支部の創設ディレクターも、このイベントに招待される。

3. フェーズ3 — 安定化と拡大

目的：Blue Horizon オーガニゼーションとその各支部の安定的な運営と継続的な成長を確保すること

実施期間：2026年8月から12月、その後も継続

内容とタスク：組織立ち上げ後、それに続く数か月は、すべての支部において運営の安定化と継続的な成長を確保することに重点を置く。メンバーを確保するため、全体組織および各国支部がそれぞれ募集活動を行う。中央の Blue Horizon オーガニゼーションは、各支部と緊密に連携し、それぞれの支部が円滑に運営できるよう注意深く支援していく。

F. サンプルプロジェクトと具体的行動

リサイクルに向けた分別教育プロジェクト：学部生は研修を受けたうえで地域の小学校を訪問し、ごみ、とりわけプラスチックごみに関する講義を行う。学部生は主として、分別の重要性を教え、実践的な活動を行い、理解度確認テストも実施する。以下に、このプロジェクトの実施案の概要を示す。

注：以下でいう「teacher」は、Blue Horizon オーガニゼーションのメンバーである学部生を指す。

プロジェクト概要およびカリキュラムは、

[以下のリンクを参照のこと：](#)

[リサイクルに向けた分別教育プロジェクトー
提案概要およびカリキュラム](#)

Ⅳ 期待される成果とインパクト

A. バックカスティング目標と長期戦略

私たちは、2050年から現在に向かって目標を設定することで、プラスチックごみ問題に対する長期的な行動を計画する際に、明確で持続可能な方向性を確保するための戦略的指針とし

て、バックカスティング目標を策定した。

1. 2050-2040年（国際的認知と長期フェーズ）

第一に、Blue Horizon が世界的な若者組織として認知されている状態を目指す。

第二に、ASEAN・日本地域におけるプラスチックごみ問題が管理段階に入り、プラスチック管理システムが安定し、リサイクルの実践と行動が定着し、プラスチックごみによる被害が抑制された状態を目指す。また、プラスチックごみ対策に向けた行動が活発に展開されている状態も実現したい。

2. 2040-2030年（拡大とシステム統合）

第一に、この期間内に、すべての ASEAN 諸国へ独立した支部を設けて拡大し、持続可能なリーダーシップ体制を確立する。

第二に、ASEAN・日本の地域社会において、すべての人々に意識が浸透し、分別が一般的な実践となり、管理されないプラスチックごみの量が減少し、各国で循環型経済が機能し始めることを目指す。

第三に、Blue Horizon オーガニゼーションが長期的な連携と支援を通じて、強固で安定した資金基盤を得ている状態を目指す。

3. 2030-2026年（組織基盤の構築と若者の接続）

初年度には、若者主導の組織として強固な基盤を確立し、ASEAN の4か国（インドネシア、フィリピン、タイ、カンボジア）および日本へ拡大する。この5か国から開始する理由は、創設メンバーであるチーム E Blue Horizon オーガニゼーションがこれらの国々の出身であり、そのため明確なコミュニケーション、調整、モニタリングを確保できるからである。このフェーズの主な重点は、Blue Horizon オーガニゼーションを紹介・周知し、組織の持続可能性の基盤として大学内に中核的な運営チームを形成することにある。その後、基盤が整ったのち、Blue Horizon オーガニゼーションは、以下を通じてプロジェクトとつながりを強化する段階へ入る：

- 幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生に対して、分別を含む廃棄物管理に関する教育を行い、意識を高めること。分別はプラスチックごみ問題に対処する鍵である。
- ASEAN と日本の若者をつなぎ、協働を促すことで、プラスチックごみ問題への対応における国際的協力を築くこと。
- ソーシャルメディアを、本組織を周知し、情報を発信するためのプラットフォームとして最大限に活用すること。加えて、私たちは Fear of Missing Out、すなわち FOMO という、現代の若者に広く見られる概念を活用して地域社会にも働きかける。これは、流行に乗り遅れることへの不安から、若者がその流れに従う傾向を指す。こうした傾向は、若者に肯定的な習慣も否定的な習慣も生じさせ得るが、本組織では FOMO を前向きな目的のために活用し、若者がプラスチックごみ管理に関心を持ち、本組織に参加するよう促したいと考えている。
- また、プログラムの持続可能性を確保するため、大学、NGO、民間部門とも連携・協働していく。



図3. Blue Horizon オーガニゼーションのバックキャスティング目標

B. モニタリングと評価

モニタリングと評価のセクションは、Blue Horizon オーガニゼーションのすべてのプログラムおよび活動が、プラスチックごみ問題への対応において、適切な方向性を持ち、測定可能で、かつ持続可能なものとなるように用いられる。

Blue Horizon オーガニゼーションのモニタリングおよび評価システムについては、以下のリンクを参照のこと：

[Blue Horizon オーガニゼーションーモニタリング・評価システム](#)

C. 短期的成果

私たちは、ASEAN と日本の若者同士のつながりを促し、連携を後押しすることで、プラスチックごみ管理に対する意識と個人としての責任感を育みたいと考えている。若者は、さまざまな活動を通じて、プラスチックごみを環境問題であると同時に、具体的な行動を求める共通の課題として捉えるようになる。短期的には、現在の主要な環境問題であり、共有された責任を要するプラスチックごみ管理の重要性について、若者の意識を高めることを目指す。ASEAN と日本の若者が連携することで、プラスチックごみ問題とその管理に対する新たな視点と、より広い理解が得られる。さらに、さまざまな教育的活動および協働活動を通じて、若者は知識を身につけるだけでなく、プラスチックごみを削減するための創造的なアイデアを生み出すよう促される。

D. 長期的インパクト

長期的に見れば、Blue Horizon オーガニゼーションは、ASEAN と日本における持続可能なプラスチックごみ管理の仕組みと文化の定着に貢献する。この組織は、管理されていないプラスチックごみの大幅な削減を促し、地域社会における循環型経済を支え、若者が持続可能な廃棄物管理の実践や具体的なプラスチックごみ対策を主体的に始められるよう後押しし、世界中の若者の間に協働ネットワークを築く。

V 結論

日 ASEAN ユース・フォーラム：Take Actions for Social Change (TASC) 2025 を通じて、私たちのチームは、セミナー、現地視察、議論を通してプラスチックごみについて多くを学んだ。それだけでなく、共に活動することそのものからも、さらに多くの学びを得た。私たちのアクションプランの核にある重要な学びは3つある。すなわち、プラスチック問題には多様な解決策が必要であること、多様性が変化を生み出す結束につながることで、そして若者の参画とリーダーシップが私たちの世界の未来を形づくるということである。私たちは、学びと数か月にわたる継続的な協働を通じて、私たちのアクションプランである Blue Horizon オーガニゼーションを構想した。これは、グローバルに活動しながら、地域に根ざした取り組みを通じてプラスチック問題の解決を目指す、世界規模の若者主導組織である。

私たちは多くの点で異なっているかもしれないが、より良い未来を望むという共通の思いを軸に、Blue Horizon のもとで一つになっていこう。若者による世界規模のプラスチックごみ対策のためのプラットフォームとして、私たちは、プラスチックに依存しない未来に向けた変化を生み出すことに尽力する。私たちは、若者には変化を起こしたいという思いがあり、必要なのはそれに火をつけるためのプラットフォームだけであることを示したい。そして、具体的な意識を高め、若者に社会変革に向けた行動を促す (Take Actions for Social Change - TASC)、そのようなプラットフォームになりたいと願っている。

参考文献など

- AIESEC. *About us.* (わたしたちについて). <https://aiesec.org/about-us>
- Alqattaf, A. (2020年11月11日). *Plastic waste Management: Global facts, challenges and solutions.* (プラスチック廃棄物管理：世界的な事実、課題、解決策). IEEE <https://ieeexplore.ieee.org/abstract/document/9319989>
- ASEAN Secretariat. (2017年). *ASEAN cooperation on environment and sustainable development.* (環境および持続可能な開発に関する ASEAN 協力). https://asean.org/wp-content/uploads/2021/08/ASEAN-Cooperation-on-Environment-at-a-glance_2017.pdf
- ASEAN Youth Organization. *By Youth for Youth with Youth.* (若者による、若者のための、若者とともに). <https://aseanyouth.net/about>
- Borgers, M. (2025年2月19日). *Plastic culture in Japan: challenges, selective sorting, and new recycling management solutions.* (日本におけるプラスチック文化：課題、選択的分別、新たなリサイクル管理ソリューション). VOYAPON. <https://voyapon.com/plastic-in-japan/>
- Envilience ASIA. *Thailand Roadmap on plastic waste management.* (タイにおけるプラスチック廃棄物管理ロードマップ). 2025年10月28日取得. <https://envilience.com/regions/southeast-asia/th/th->

[waste/th-plastic-waste#:~:text=It%20is%20estimated%20that%20approximately,waste%20plastic%20usually%20creates%20microplastics.](#)

- 国際自然保護連合 NL [IUCN NL] . (2025年6月13日). *Indonesia's struggle with plastic waste*. (インドネシアのプラスチック廃棄物との闘い). <https://www.iucn.nl/en/blog/indonesias-struggle-with-plastic-waste/>
- Koons, E. (2024年10月10日). *Plastic pollution in the Philippines: a call for urgent action*. (フィリピンにおけるプラスチック汚染：緊急の行動を求める呼びかけ). Climate Impacts Tracker Asia. <https://www.climateimpactstracker.com/plastic-pollution-in-the-philippines/>
- Lodhi, A. (2025年1月14日). *What is 'waste colonialism' and why has Thailand banned imports of plastic?* (「廃棄物コロニアリズム」とは何か、そしてなぜタイはプラスチック輸入を禁止したのか). Al Jazeera. <https://www.aljazeera.com/news/2025/1/14/what-is-waste-colonialism-and-why-has-thailand-banned-imports-of-plastic>
- Ningrum, R. S. (2024年1月5日). *SUPPRESSING THE USE OF SINGLE-USE PLASTICS THROUGH YOUTH ACTIVIST PROGRAM*. (若者アクティビスト・プログラムを通じた使い捨てプラスチック使用の抑制). WWF. <https://www.wwf.id/en/blog/suppressing-use-single-use-plastics-through-youth-activist-program>
- Pustadan, R. (2024年2月15日). *THE GROWING THREAT OF MICROPLASTICS AND PLASTICS*. (マイクロプラスチックおよびプラスチックの脅威の増大). National Research Council of the Philippines. <https://nrcp.dost.gov.ph/the-growing-threat-of-microplastics-and-plastics/>
- Riliananda, P. D., & Lotulung, G. (2025年7月9日). *Not Our Trash: Indonesia's Struggle with the World's Plastic Waste*. (これは私たちのごみではない：世界のプラスチック廃棄物に対するインドネシアの闘い). FairPlanet. <https://www.fairplanet.org/story/not-our-trash-indonesias-struggle-with-the-worlds-plastic-waste/>
- Rogers, J. (2024年1月31日). *Japan has a big plastic waste*

problem. (日本は深刻なプラスチックごみ問題を抱えている). Japan Today. <https://japantoday.com/category/features/environment/japan-has-a-big-plastic-waste-problem>

- Seema. (2026年1月6日). *Communications Officer, Trash Hero World (remote)*. (Trash Hero World のコミュニケーション担当者〈リモート〉). Trash Hero World. <https://trashhero.org/communications-officer/>
- The Annie E. Casey Foundation. (2024年1月24日). *Strategies for Youth Engagement* (若者参画のための戦略). <https://www.aecf.org/blog/strategies-for-youth-engagement>
- 国連開発計画【UNDP】カンボジア . (n.d.). *Combating Plastic Pollution in Cambodia*. (カンボジアにおけるプラスチック汚染対策). 2025年10月27日取得 <https://www.undp.org/cambodia/projects/combating-plastic-pollution-cambodia>
- 国連開発計画【UNDP】(気候の約束). (2025年10月22日). *Advancing circularity in Cambodia: Focus on plastic pollution*. (カンボジアにおける循環性の推進：プラスチック汚染への焦点). <https://climatepromise.undp.org/news-and-stories/advancing-circularity-cambodia-focus-plastic-pollution>
- 国連開発計画 モンテネグロ【UNDP】. (2022年5月22日). *The low level of youth participation in public life is a challenge for the whole society* [Press release]. (公共生活への若者の参加水準の低さは社会全体にとっての課題である【プレスリリース】). <https://www.undp.org/montenegro/press-releases/low-level-youth-participation-public-life-challenge-whole-society>
- 国連環境計画【UNEP】. (2023年). *Turning off the tap: How the world can end plastic pollution and create a circular economy*. (蛇口を閉める：世界はいかにしてプラスチック汚染を終わらせ、循環型経済を実現できるか). 国連環境計画. <https://www.unep.org/resources/turning-off-tap-end-plastic-pollution-create-circular-economy>
- 国連環境計画【UNEP】(n.d.). *Plastic Pollution*. (プラスチック汚染). 国連開発計画. <https://www.unep.org/plastic-pollution>



図4. Team E Blue Horizon の写真

プログラムの日程

オリエンテーション & オンラインセミナー1

2025年8月16日（土）

- ▶ 自己紹介
- ▶ 基調講演：岡本正明 教授（チーフ・アドバイザー）
- ▶ 講義：Deo Florence L. Onda 准教授
- ▶ ファシリテーター（Next Creation）によるグループアクティビティ

ASEAN フィールドトリップ

訪問国：フィリピン（2025年8月31日（日）～9月5日（金））

開会セッション

- ▶ 講義：浅利美鈴 教授
- ▶ 講義：Maria Kristina Palar 准教授

セブ訪問先

- ▶ オランゴ島野生生物保護区
Carl Angelo Jumalon（生態系管理専門官）
Devine Grace Jumao-as（開発管理官）
- ▶ SM GUUN Environmental Company Inc.
Hiroschi Haraki（ゼネラルマネージャー）
Prettie Acop-Jalang（管理／PCO／営業・マーケティング担当）
- ▶ マンダウエ・グリーン・ラーニング・エコパーク
Rosemarie Chavez（総務局 次長）

マニラ訪問先

- ▶ 環境天然資源省（DENR）
Bhona May Oñarte（環境管理専門官）
Gabrielle Raine Aguzar（環境管理専門官）
- ▶ MMDA 固形廃棄物管理局
Jose Nino Beltran V（プロジェクト評価官）
Ma. Lisa Caguimbal（プロジェクト開発官）
David RJ Viola（プロジェクト開発官）
- ▶ バセコ地区
Laarni “Lala” Salanga（UPA／KABALIKAT CCR 都市貧困層生計支援担当）
- ▶ Circular Explorer
Nathalie Inductivo（職務代行サステナビリティ・マネージャー／Holcim「Circular Explorer」プロジェクト・コーディネーター）
- ▶ John Ivan Cunanan（フィリピン大学 海洋科学研究所 インターン）
- ▶ JunkNot
Wilhelmina “Willie” Garcia（JunkNot 創設者）

オンラインセミナー2

2025年11月15日（土）

- ▶ ASEAN フィールドトリップ後のアクションプラン中間発表
- ▶ アドバイザー・メンターからのフィードバック
- ▶ ファシリテーターによるワークショップ



フィリピン・オランゴ島での集合写真



オランゴ島でのゴミ拾い



バセコ地区を訪問する参加者



Junknot でアップサイクル体験

訪日研修

2025年11月30日（日）～12月7日（日）

東京訪問先

- ▶ 東京都環境局資源循環推進部
 - －計画課 課長代理（計画担当） 太田 理美
 - －一般廃棄物対策課 課長代理（支援担当） 黒野 祥子
- ▶ 株式会社カマン (Megloo プロジェクト)
 - －代表取締役／CEO 善積 真吾
- ▶ ファブリック株式会社
 - －戦略デザインリード チェン レベッカ
- ▶ NPO 法人 荒川クリーンエイド・フォーラム
 - －理事／オフィスマネージャー 今村 和志

大阪訪問先

- ▶ 大栄環境株式会社
 - －執行役員／技術部長 山田 眞
 - －技術部 研究開発課長 橋本 康司
- ▶ DINS 関西株式会社
 - －取締役 八木 達也
 - －R&E 事業所 所長 橋本 和也

奈良訪問先

- ▶ 株式会社良品計画 無印良品 イオンモール橿原
 - －店長 下田 裕
 - －副店長 松井 正明

京都訪問先

- ▶ さすてな京都（京都市南部クリーンセンター環境学習施設）
- ▶ 亀岡市／Circular Kameoka Lab
 - －亀岡市 環境先進都市推進部 環境政策課 課長 鈴木 長
- ▶ 保津川遊船企業組合
 - －代表理事 豊田 知八
- ▶ 京都里山 SDGs ラボ（ことす）
 - －一般社団法人びっくりエコ研究所 業務執行理事／事務局長 光本 年男
 - －総合地球環境学研究所 基盤研究部 教育部門 浅利研究室 張 馨キ

アクションプランの最終発表：2025年12月6日（土）

- －会場：京都大学東南アジア地域研究研究所
- －コメンテーター：
 - ・岡本正明、京都大学東南アジア地域研究研究所 教授
 - ・浅利美鈴、総合地球環境学研究所 教授
 - ・Maria Kristina Oquinena Paler, サン・カルロス大学 准教授



DINS 関西でリサイクルの工程を見学



無印良品訪問集合写真



京都大学での集合写真



最終発表会の発表グループ

サポーター

■ チーフ・アドバイザー

岡本 正明（京都大学 東南アジア地域研究研究所 教授）

現在、デジタル化によって引き起こされる東南アジアの社会・政治的変容、特にインドネシアにおける動向を主たる研究テーマとして学際的な共同研究を行っている。また、テキストおよびビジュアルを用いたソーシャルメディアに焦点を当て、東南アジアにおける選挙や政治キャンペーンの劇的な変化を理解するための共同研究を推進している。さらに、東南アジアにおけるアブラヤシ農園の急速な拡大とその生態学的・社会経済的影響、都市のヒートアイランド現象およびその長期的な社会的影響など、環境問題に関する分野横断的・超学際的研究にも取り組んでいる。これらの研究は、インドネシアをはじめとする多様なステークホルダーとの協働を通じて実施されている。

■ アドバイザー

浅利 美鈴（総合地球環境学研究所 教授）

京都に所在する総合地球環境学研究所の教授であり、廃棄物管理、資源循環、持続可能性教育を専門としている。2004年に京都大学大学院工学研究科にて博士号（工学）を取得。

環境工学と社会的実践を統合した研究を行い、廃棄物を人々のライフスタイルや社会構造を映し出す指標として捉える視点から研究を展開している。「びっくり！エコ100選」、「エコ・パワープラント」、「エコ〜るど京大」、「京都超 SDGs コンソーシアム」、「京都里山 SDGs ラボ（ことす）」など、多様な取り組みを通じて、大学内外での持続可能性の推進に積極的に関わっている。

近年は、プラスチック廃棄物管理、地域主体のごみ分別、持続可能な水産物サプライチェーンに関する国際共同研究にも注力している。フィールドワークに基づく学びと社会への発信を重視し、学術研究と実践的な環境行動をつなぐことを目指している。

■ アドバイザー

橋本 征二（立命館大学 教授）

国立環境研究所の主任研究員、東京大学の客員准教授、イェール大学の客員研究員などを経て、2011年より立命館大学教授を務めている。

研究分野は、持続可能な資源・廃棄物管理に関する評価手法およびシステム設計であり、資源の採取から廃棄物の最終処分に至るまでの一連のシステムを包括的に捉えるアプローチを専門としている。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第4次評価報告書における「廃棄物管理」章の主執筆者（2004-2007年）を務めたほか、国連環境計画（UNEP）の国際資源パネル（IRP）委員（2015年〜）や、国際産業エコロジー学会の評議員（2009-2011年）を歴任している。京都大学大学院工学研究科にて博士号を取得。

■ メンター

Maria Kristina Oquinena Paler (サン・カルロス大学 准教授)

Paler 准教授は、フィリピン・セブ市に所在するサン・カルロス大学人文・自然科学部 生物学科の准教授である。教育者として、環境科学、生態学、環境汚染、循環型経済に関する大学院科目を担当している。

スイス・パーゼル大学および日本の千葉工業大学にて、環境システムの中のマクロプラスチックおよびマイクロプラスチック分析の研修を受けた。環境科学者として10年以上にわたり、プラスチック問題における社会と生態系の相互関係を研究してきた。

生物多様性とプラスチックの相互作用およびその影響に関する研究成果を含め、数多くの論文を発表している。また、「東南アジア海洋プラスチック・プロジェクト」、[「東南アジア諸国における海洋プラスチック廃棄物中のベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤 \(UV-328\)」](#)、および「ステーキホルダーの視点から生態系の生物多様性および関連する生態系サービスに対するプラスチック汚染の影響を理解する研究 (Plasti-BASE)」などのプラスチック関連研究プロジェクトにおいて、共同研究者として参画している。

■ ファシリテーター (Facilitators)

Gilang Andi Pradana (Next Creation ファシリテーター)

Next Creation の共同創設者兼プログラムディレクターとして、遊び心と協働性を重視した手法により、企業、スタートアップ、中小企業、行政機関、大学など、日本およびインドネシアの多様な組織に対してイノベーション・ワークショップを主導している。

デザインスプリントの認定ファシリテーターであり、ロンドン大学にてコンピュータサイエンスの博士号を取得。慶應義塾大学のグローバル・イノベーション・デザイン・プログラムの一環として、東京、ニューヨーク、ロンドンにおける研修を経て、メディアデザイン分野の修士号を取得した。現在は立命館アジア太平洋大学でも講師を務めている。

清藤 貴宏 (Next Creation ファシリテーター)

Gilang Andi Pradana 氏と共に Next Creation を共同創設した CEO であり、日本の組織におけるイノベーション推進を支援している。両者の協働は立命館大学のアントレプレナーシップ・プログラムに端を発し、初期の事業は複数のビジネスアワードを受賞し会社設立の基礎となった。

テクノロジーおよび小売分野における実務経験を有する経営コンサルタントであり、九州大学にて MBA を取得している。Next Creation での活動に加え、110年以上の歴史を有する餅屋を含む複数の家業を統括しているほか、長崎大学にて講師も務めている。

ナラティブ・レポート レビューア

Gilang Andi Pradana

Annisa Arsyad

あなたの言葉で TASC を表すと？

ニックネーム	あなたにとって、このプログラムは？
Pich	私にとってのもう一つの家。大切な ASEAN と日本の友人たちと出会い、安心できて、楽しく、愛を感じられる場所。
Bambi	持続可能で平和な未来のための解決策を生み出すプログラム。
Eaindray	本当の自分の声、可能性、そして自信を見つけることができた場所。
Sona	新たな視点を与えてくれた、挑戦であり特別な機会。
Lucas	つながるために生まれてきた。
First	情熱あふれるアジアの若者たちと共に、多様な視点から環境行動を学んだ、目を開かされる経験。
Min Han	社会的責任を担う力を与えてくれた、大切な旅。
Yu	友情とチームワークは国境を越えるということを教えてくれたプログラム。
Eak	愛、友情、そして知識に満ちた、忘れられない経験。
Vita	出会える確率が0.000067% しかなくても、運命は私たちを引き合わせてくれた。
Niña	忘れられない思い出と絆を生み出した、人生を変える学びの経験。
Amir	多様性の中で一つになった、示唆に富み、忘れられない旅。
Put	かけがえのない気づきと、長く続く友情を得た経験。
Hope	途方もない夢が叶い、心から感謝している一生忘れられない機会。
Joi	自信、スキル、友情が花開く庭のような場所。
Chinta	若者を力づけ、国際理解を育み、新しい家族を与えてくれた奇跡。
Shiv	言葉では言い尽くせないほど素晴らしく、学びに満ち、記憶に残る経験。
Lisa	ASEAN と日本の若者が結束し、成長、友情、そしてより明るい未来を育む場。
Baginda	心から感謝している、人生を変えるプログラム！
Togo	新しい友人たちと自分の考えを共有できた、特別な機会。
Pream	心の奥深くに残る、コアメモリー。
Ram	友情を通して目的を見出し、変革を訴える経験（さあ行こう！）。
Adam	桜の花のように、短くも意味深く、忘れられない時間。
Kai	自身の将来へとつながる、多様で実りある経験。
Kaede	大学生活での最高の思い出 — 忘れられないもの。
Najo	より良い未来に向けて、計画し、行動し、そして共に祝おう！
Jen	学びと友情のための空間。
Chloe	学び、耳を傾け、多様な視点を理解し、成長することができた意義ある経験。



編集・発行／独立行政法人 国際交流基金
〒160-0004 東京都新宿区四谷1-6-4 四谷クルーセ
TEL 03-5369-6074

制作／広研印刷株式会社

©2026 The Japan Foundation